
アメジスト

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメジスト

【Nコード】

N4310Z

【作者名】

しらせ

【あらすじ】

楽して生きることがすべてなアメジは100年の時を越えて巨大破壊生物「黒水晶」と戦う。異世界少女アクション。チベット密教文化からインスピレーションを得た世界観。 サイト掲載作品を手直ししつつのUPです。 2006/02/18完結済。 全70話。

第1話

「おのれーおのれモンドめーっ。大地の底から呪ってやるうーっ。」

冷たい石の棺の中、少女はうなり声を上げていた。

なぜ、自分はここにいいのか、考える余裕すらなかった。

怒りにまかせて、自分の最期を實にくだらな理由で決めてしまった。

「あたしと結婚するって約束したじゃん。ガキのころから、ずっと前から交わした約束をっ」

少女が怒っているのは失恋？ いや、少し違う…。

「やぶるかー？その日につ、自分が族長になる、その日につ。族長の妻の座っ、あたしの夢っ！」

夢、自分の夢を台無しにされた事に対する怒りと…

「あんな大勢の前でだっ、あたしゃ、ちょーはしゃいで、とんだ赤っ恥だつての。よりによって、同じ巫女のシルバと、あんな地味な女と…」

プライド、プライドを傷つけられた事に対する怒り。

なぜ彼女はこんな棺の中にいるのか、だ。
それは、彼女の夢が破れた直後の事…。

「アメジよ、水晶の聖乙女、やってみる気はないか？」

白い髪を肩まで伸ばした初老の男は少女に問いかけた。

アメジと呼ばれた少女は、大地に寝転がったまま、答えた。

「トパーズ様。なに？ それ。あたし面倒臭い修行やだからね」

ふてぶてしく答える少女、しかしいつもの事なのだろうか、そのトパーズと呼ばれた男は態度を変えず、続けた。

「水晶の聖乙女は大地の底から、このリスタルの民と大地の為に、ただ祈り続ける。」

これはアメジ、巫女としてろくに修行をしておらんお前でも、立派にこなせる役目だぞ。どうだ？」

「それって、確か、生き埋めになるってやつじゃない？ ジョーダン！ あたしには夢があるの、そんなくだらない事、やるわけないじゃん。」

「そうだな…。ま、無理にとは言わん。だが私も大神官として、お前を巫女として育てねばならん。それにお前の父にお前を一人前に育てあげると約束したからな。」

「オヤジのことはいいじゃん。勝手に遺跡の研究だとかで、山の遺跡で死んじゃった奴の事は。」

アメジの父はどうやら放任主義だったようだ。自分の意思を縛られるのが嫌で、趣味であり、生きがいであった古代の遺跡やら、このリスタル独自の特殊なチカラ、この地の民は「水晶」と呼ぶそれを研究していた。

それは生あるモノの中にある気の流れ、人間をはじめ、この世の生

物はこの大地から、流れてくる気によって、エネルギーを得ている、という。中国でいう気孔のようなものだろうか、そのチカラを水晶と呼ぶのだと。

「お前はほんとにオールドに似ている。いいところも、悪いところも。」

「げっ、やめてよ、トパーズ様っ。あんなのと似てるなんてーっ、嘘でも言わんといてーっ。」

「ハハハ。」

「そろそろ広場まで行かないと。ほら、今日はモンドのっ。」

「ああ、そうか。あやつもついに族長に就くのか、お前以上に心配な奴だからな。」

「だから、トパーズ様がしっかりサポートしてやってよ。あたしだって楽できるしー。」

「ん、アメジ、どどういう事だ？」

ここリスタルは、北は山脈、南は草木も無い砂漠に囲まれた、山岳地帯にある集落である。厳しい環境の為か、外からも内からも人や生物の移動は無く、陸の孤島と化していた。

唯一の集落、リスタルの民が住むこの街の中心にある広場に、アメジは走っていった。

今日はあるイベントが開かれる。モンドの族長就任の式だ。

モンドは族長の息子であり、アメジとは従兄妹であった。モンドはアメジに負けず劣らずの、ダメ人間だった。

アメジと交わした結婚の約束も、族長になれば、周りが世話をやいてくれると思い込み、お互い楽したいがための約束だった。

アメジは息を切らしながら、広場の人の波をかきわけながら、台の上で挨拶を始めるモンドへと近づいていった。

「モンドっ。」と、小さくアピールするが、彼の視線はまったく別のほうへ向けられていた。

「みんなー、あと今日は、オレの花嫁となる人も紹介するー。」

台の上でだらしなく揺れながら、へらへらとテレながら、彼はその花嫁の名を呼んだ。

「そう、その花嫁は、あたしっつ！」

モンドが話す前にアメジが叫んだ。

「ええっ、アメジ？おいモンド、マジかよ？」「あのケツでか女だぞ。」

周りの若者たちが野次を飛ばす。

「うっさいんじゃないっ、カス共！前から決まってた事なの！ね、モンド。」

「い、いやアメジ…、オレの花嫁は…。」アメジから目を逸らしながら、モンドは言った。

「シルバだっつ。」

「…はあっ？」

モンドは隣にシルバという少女を呼んだ。

頬を染め、目を伏せながら少女はモンドの傍へと駆け寄った。えへと、照れながら寄り添う二人には祝福の声が上がる。

逆にアメジには「バツカじゃねーの、こいつ。」「とんだ勘違い女だよ。」

馬鹿にされてる。

激しく馬鹿に……。怒りがこみ上げ震えだすアメジ。

「ご、ごめんよー、アメジ。言おうと思ってたんだけどさ、タイミングがさ。」

いいわけモンド、しかし、今こそ最悪のタイミングではなからうかキッとモンドを睨みつけるアメジ。殴られると感じたモンドは反射的に身構えてしまった。しかし、アメジは鬼の形相のまま、広場から走り去ったのだ。

夢破れし、アメジの思考はぶち壊れていた。

アメジが向かったのは、街の外の山道。その先には、古代の遺跡の一つ、「水晶神殿」、岩壁を削られ造られてある。

そこには、トパーズと巫女の少女がいた。

「どうしたアメジ、用なら後にしろ。これから【水晶の聖乙女】の儀式をせねば…」

「まって、ソレ、あたし、やる。」

「ええっ?!」

何があつた、と聞くトパーズには答えず、石の棺へと勝手に入っていくアメジ。

「立派な聖乙女になります、とモンドに伝えてください。」

夢叶わぬこの世に未練などなく、あの世から呪いを放つ道を選んだ。そして、いつのまにか、眠りについていったのだった、モンドめ、とつぶやきながら…。

あれから何時間眠っていたか、まぶたに光を感じアメジは起こされた。

トパーズ様？ いやちがう。若い男。反射的にアメジは飛び起きた。

「モン…」 叫びかけたアメジより早く、その男は語りかけた。

「あなたが、水晶の聖乙女殿。」

「え。」

目の前にいる彼はアメジのまったく知らない男だった。

「だれよ？ あんた…。」

「私はリスタルの族長を務める、ジストと申します。」

（なに言ってるの、こいつ、族長はモンドがなったばかりじゃ…？）

この出会いこそアメジの樂して生きる夢を遠ざけることとなってしまったのだった。

第2話

「ジストー、もう、止めるたるよー。」

「タル。この石棺で最後だ、もう少し待っててくれ。」

冷たく静かな水晶神殿に、一つの人影と一つの小さな影があった。

この遺跡には、百年前まで行われていたというある儀式にその身を捧げた少女たちの亡骸が納められていた。

標高の高い、このリスタルの地の、ここはさらに天に近い場所である為、神殿内に時たま、冷たい風が流れこんでくる。

青年に付き添ってきた小さな生物は風によって、毛を膨らませられ、寒さに震えていた。

青年は最後の石棺に手をかける。

「どうせまた骨たるよー。もう骸骨はイヤたるー。」

どうやら他の石棺は、すべてこの青年が開けたようだ。石棺の中にいた少女達は、皆骸と化していた。なぜ、彼はこんな事をしているのか…。

「フンツ」青年は石の蓋を持ち上げようと力を籠める。

しかし、いくら大の男であれ、一人で持ち上げられる重さではない。だが、蓋はゆっくりと動きだした。

彼は体内の水晶（このリスタル独自の気の使い方）を自在に操れる「水晶使い」だった。

手のひらが、ポウと光りながら、さらに力が高まっていく。その数秒後、蓋はみごと外れたのだ。

「ああつ、どーせまた骨骨たるつ。だいたい百年前の人間が生きるわけないたる。」

「タル…。見る…」

「生きてたらそいつバケモンたる。そいつこそ黒水晶たるよっ。」

「タル、生きてるぞ、彼女だ…。ラルド様の言った通りだ」

「へ、ええっ？」

その石棺の中には、今にも目覚めそうな少女の姿があった。

興奮を抑えながら、青年は少女へと近づく。

「んんっ。」「少女の目蓋がぎゅっと動いた。」「あっ！」

少女が目を開まし、彼と目が合った。

「あなたが水晶の聖乙女殿」

彼はそう語りかけた。わけもわからぬ顔で彼を見返す少女とは対照的に、青年の顔は、輝きに満ちていた。

アメジ、フリーズ状態

大地の底から呪ってやる、と。「水晶の聖乙女」をやるといいだした自分。

自分をフツたモンドに対して、石棺の中でどこかと怒っていたのは何時間ほどか…？

気がつきや目の前に見ず知らずの男。しかも、言ってる事意味不明！とりあえず、深呼吸、でもう一度、男に問いかける。

「で、あんた、誰？」

「ですから私は、現在族長を務める…。。」

「へ？モンド、もう面倒臭くなって、族長辞めたのか？」

「モンドとは？」

二人の問答をイライラと聞きながらも一つの口が開いた。

「ジスト、こいつダメっぱいたるよ。きっと、百年も眠っててボケたに決まってるたる。使えないたるよ。」

生意気に話す小さな生物を見て、アメジは驚いた。

「ブツ、ちよつ、こいつまさか聖獣？」と、なぜかふきだすアメジにジストが「そうだ」と答えた。

「タルは私の良きパートナーです。」

彼らが聖獣と呼ぶその哺乳類は、このリスタルの地に、リスタルの民が移住してくるずっと昔から、ここに住んでいた。

彼らは、人と共存する道を選び、言葉を理解し、話せるまでになった。

彼らも、水晶のチカラをその身に秘めており、ジストのような「水晶使い」と組んで、共に過ごしている。

「あたしが知ってる聖獣のプラチナは、もっとスラっとしてて、足も顔もスツキリしてて……」

「プラチナ知ってるたるか？タルのご先祖様たるっ。」

「は？ご先祖？何言ってるんの、まだ現役よっ。だいたいアンタみたいなブツサイクな聖獣見たことないわよ。」

「ぶつちーっ。ブチキレたるーっっ！」

次の瞬間、アメジが激しくブツ飛んだ。タルの飛び蹴りが炸裂したのだ。

「どこあーっっ。」

変な悲鳴を上げ、凄まじい格好で、アメジはすっ転んだ。

「コラっ、なんてことしてんだ、タルっ。」

ジストがひょいと、タルを抱き上げた。

「だってー、ジストー、こいつがタルのことバカにしたたるからー。」

「だつてさ、ほんとにブツサイクなんだもん。こんなモチみたいにぺったんこな顔でさー。」

アメジが、ムクリと起き上がった。

「いいか、タル。私達は、聖乙女殿にお力を借りにきたんだぞ。」

「??」（あたしの力を借りに来た?どーゆーこつちゃ?）

「うつつ、でもでも、タルとジストでがんばれば、黒水晶なんて倒せるたるっ。」

「それができないからこーしているんだろ?水晶使いと聖獣だけでは、黒水晶とまともに戦えない。」

「黒水晶……」アメジはその名に聞き覚えがあった。

（でも、それって確か、あたしが生まれる前に絶滅したって聞いたけど…）

「黒水晶と戦うには、私とタルだけではダメだ。巫女のサポートが必要だろう。」

「巫女ならサファがいるたるー」

「サファは、まだ前の戦闘での疲れが癒えてない。今では巫女も彼女一人になってしまったからな。」

黒水晶と戦う?

やっぱりアメジには、この二人の会話は理解不能だった。

黒水晶は知っている。この目で生きているところは見たことは無いが。

以前アメジの父「オールド」が亡くなった後、葬式で初めて知り合ったモンドと一緒に、父オールドがよく通っていた山脈にある遺跡をと巡ったりしていた。

その山道の途中、何度か目にした、巨大な生物の化石。

このリスタルに、昔からいたといわれ「黒水晶」と呼ばれている。

見た目は鳥類のようで、はるか昔に滅んだ恐竜にも似てる。

その体は巨大で3Mから10Mはあるといわれた。さらに、凶暴で人を喰らい、その体内には毒を宿し吐く息だけでも、生物を死に追

いやったという。

全身ドス黒く、目も不気味に黒くギラギラと輝き、大きなその体には、桁外れな水晶を秘めていた。そのことから、人々はその怪物を黒水晶と呼び、恐れたのだ。

しかし、リスタルの民は、実に好戦的な民族で、恐れるだけでなく、戦う道を選んだのだった。

その戦いの歴史は、リスタルの民がこの地に移住してきた、千年も昔から続いていた。

人は、聖獣と力を合わせ、たくさん犠牲を出しながらも生きぬいてきたのだ。

その戦いも、アメジが生まれる少し前、アメジの父オルドや、その弟でありモンドの父の二人が中心となり、黒水晶を絶滅させ、長い黒水晶との戦いの歴史に幕を下ろしたのだった。

（そう、黒水晶って、とっくの昔に滅んでんじゃん。なのに、こいつらの言ってる事って…。）

「とりあえず、街に戻ってラルド様に報告しよう。黒水晶がこの辺りに戻ってくるまえに。」

さ、聖乙女殿。私と一緒にきてください。詳しくは、向こうでお話します。」

混乱ぎみのアメジに、ジストが優しく手を差し出す。タルはまだ不満げだが。

（よくわかんないけど、こいつが族長ならあたしの夢もまだ、終わっちゃいないよね？

ふふふ、ってかモンドより断然いい男だし。）

怪しい笑みを浮かべるアメジに、タルがピクリと反応する。
アメジは未だ自分が百年先の未来にいる事に気づいてはいなかった。
そして、この直後に会おう、最悪の出来事にも……。

第3話

「聖乙女殿、足元に気をつけてください」

「おおっ、どうも……」

ジストに導かれ、アメジは水晶神殿を出る。そのジストの隣をブツクサと不満気なタルが歩く。

アメジ、この面倒くさがりな女の瞳は希望に満ちていた。

「夢は終わってないぜっ！」

「え、なにか言いました？」

「ねえ、アンタさ、もしかして結婚してる？」

「え、いいえ。まだですが……」

「よっしゃーっ！」とアメジがガッツポーズをとった瞬間、タルの飛び蹴りがまたも炸裂した。

「いってーっ。またやりやがったなー、モチ聖獣ーっ。」

「お前っ、今ジストのことやらちー目で見えたたるよっ。」

こんのー！と、もみ合いそうな二人をジストが止める。

神殿を出てからも、アメジとタルは、フーっと睨み合っていた。

土と石だらけの、このリスタルの山道を下りながら、眼下に映るは、リスタルの街。

世界から隔離されたこの地は、百年の歳月を経ようが、大きく変わることはなく、アメジのいたあの頃と、ほぼ同じに見えた。

そう、遠目からは。この時、アメジは違和感を感じることはなかったが……。

その直後、その気持ちは吹き飛ぶことになる。

「！！」

その異常に真つ先に気づいたのはジストだった。

「タルっ！」

自分のパートナーを傍へ呼ぶ。その声にタルも状況を理解し、すぐにジストの傍へと駆けた。

アメジだけはなにも理解しておらず、え？え？となるだけだった。だが、ただならぬ事態だとすぐにわかった。

まだ日中だというのに、アメジ達の上は真つ黒な影に覆われた。見上げると、そこには巨大な怪物がアメジ達を見据えていた。

「黒水晶……」

「なっ、なんだーっ？！ このバケモンはーっっ！！」

慌てふためくアメジとは対照的に、ジストは冷静にそのバケモノを見ていた。

「思っていたより早く戻ってきたな。」

「案外この女の水晶に呼ばれてやってきたのかもたるよ。」

（もしかして、これが黒水晶？ええっ、でもなんで？急にこんなんが現れんのさっ？ そしてなんでこいつらは冷静なんだよ？まさか、ドッキリなのか？）

黒水晶は三人を確認すると巨大な口をさらに広げて、襲いかかってきた。

うっそーん。と立ち尽くしていたアメジはジストに抱きかかえられ、

そこから下三メートルへと飛び降りた。
タルも同時に続く。

その素早い判断と行動で、少し余裕の時間ができた。あっけにとられていたアメジにジストが訊ねた。

「聖乙女殿、ドクロ水晶は？」

「は？ドクロ水晶？」

「ジスト、こいつ持っていないたるよ。」

「え…。」

ジストは、本当に持っていないのか訊ねた。

アメジはなにソレ？とわけのわからない顔をしていた。
本当になにも持っていないのだ。

それを知ったジストはさっきのクールな表情からがっかりした顔になった。タルは「やっぱり」とため息をついた。

「巫女の力無しでは、黒水晶へ攻撃が届かないからな…」

「こいつ巫女のくせに、ドクロ水晶持って無いなんて、ニセモンたるよつ。」

（なんなのよ、ドクロ水晶って？

ん…、そういえば以前、トパーズ様がちゃんと修行すればその扱い方を教えてくれるって、見せてもらったおぼえが…。

そう確か、透明なドクロをかたどった石で、手のひらに乗るサイズの…。

それに水晶をこめるとかなんとか。）

とアメジがのんびり考えているうちに、黒水晶は目の前にまでやってきた。

「どわわわぁーっ！」とまたも慌てふためくアメジとは反対に、

ジストとタルはクールでいた。

「しかたない。気をそらすことくらいしかできないが、タル。私たちだけでいくぞ。」

「わかつたる。」

「いいか、タル。今日は戦いをしにきたのではない。聖乙女殿を無事、ラルド様の元までお連れすることだ。」

そう言うと、ジストはアメジに街のほうまで走るようにいった。

半分パニクリながらも、アメジは頷いた。

黒水晶はまたも巨大な口を広げながら襲いかかってきた。

アメジは駆け出し、ジストは自らの水晶を高め、それを右手へと集め、激しく輝きだしたその右手に集まった水晶を、聖獣タルへと向けて放つ。

水晶使いジストの水晶によって、さらに大きな水晶をその体に宿したタルは、輝く光の生物兵器と化す。

光の兵器となったタルは光のごときスピードで、空へと駆ける。

そして直線的な動きで黒水晶へと向かった。

しかし、黒水晶は、それを簡単にかわした。

ジストもタルもそうなることはわかっていた。

聖獣は水晶使いに水晶を注ぎ込まれることにより、戦いの力を得る。それにより強力な光の兵器となるが、その状態の聖獣は、ほとんどの感覚（視覚、聴覚など）を閉じ、攻撃へとまわすため、自分の進む道すらわからなくなり、直線的な動きしかできないのだ。

その上黒水晶は、直線上の動きに強く、その行動を見切られる可能性が非常に高いのだ。

それをサポートできるのが、リスタルでは巫女と呼ばれる、女の水
晶使いなのだ。

「ひい、ひい……」

アメジはひたすら駆けていた。

とはいえここは山道下り道。おもわず転がりそうになり、アメジは転ぶ直前、下の道まで飛び降りた。

ダメ人間といわれてきたアメジだったが、運動神経はなぜかよかった。

ふう。と一息ついたアメジは上のほうにいるジスト達を見た。

「あいつら、大丈夫なのか？黒水晶と戦うなんて、だいたい滅んだんじゃないかったの？ オヤジ達の代で終わったって聞いてたのに。」

黒水晶が絶滅した後、対黒水晶の為の職業だった水晶使いと巫女は、祭りが主な仕事となっていたのだった。

巫女は踊りを舞い、水晶使いは曲を奏でる。

アメジたちが行っていた修行も黒水晶と戦わなければ無意味なものがほとんどであったが、それはもう儀式と化していた。

「はぁー。とにかく街に戻らないと。トパーズ様ならなにか知ってるかもね。」

アメジは飛び降りながら、山を下り、街をめざしていた。

街を目前にし、あの声が聞こえた。

「聖乙女殿っ。」

ジストとタルが駆けつけた。

あの直後、黒水晶はなにかに呼ばれたように、「ギヤアアー」と鳴いたかとおもうと、突然羽ばたき、山脈の向こうへと飛んでいった。

のだった。

「では、聖乙女殿。ご案内します。」

（案内つて、あたしゃここの生まれなんだけど…。しかし、この男
バカ丁寧な奴だな。）

「てゆうか、その聖乙女殿でのやめてよね。あたしは……」

（ほんとに望んでなつたわけじゃないし、ヤケおこしたただけだもん。
）

「では、なんと呼びすれば…?」

「アメジ。アメジでいいわよ。アンタは、ジストていつたつけ?」

「アメジ…」

「そっ！よろしくね、ジスト」

そう言つてジストへと歩み寄るアメジに、「近づくな!」と、タル
がどかっつぶつかる。

山道から街へと入る。山岳地帯にあるリスタルは、街も山に沿い、
段々状に建物が立ち並ぶ。

ゆえに、街は階段だらけであつた。

アメジ達が街へ入ると、たくさんの人が三人を迎えた。

しかもえらい歓迎ぶり、「この方があの……?」と皆珍しそうにア
メジを見ていた。

ジストには「族長、おかえりなさい。」の聲がかかる。アメジにと
つては異常な光景だった。

いつもバカにされてばかりだったアメジにとって、こんな歓迎をうけるのは初めてだったのだ。その時、アメジは少し違和感を感じた。だれ一人として、知った顔がないのだ。あと、街の様子もどこか違う気がした。あとでトパーズ様に会いにいくなどとアメジが考えていると、人ごみの中からジストの名を呼びながら、アメジと同じ年頃の少女が現れた。彼女はジストの姿を確認すると、うれしそうな表情で彼の傍へと駆け寄った。

「ジスト様っ！」

「サファ」

サファと呼ばれた少女は潤んだ瞳でジストを見上げた。

この雰囲気からして、二人は恋仲なのでは、とアメジは悟った。確かにいい男がそうそうフリーではない。

「マジ？」

早くもアメジの夢は崩れ去るのだった。

第4話

「ジスト様、おかえりなさい。」

「ああ、サファ。ただいま。」

さわやかに挨拶をかわす男女を隣に、アメジは一人落ち込んでいた。

夢は終わった、と。

「それより、まだ動き回らないほうがいいんじゃないか？ ケガも完治してないだろう。」

「ええ、でも心配だったから…。」

あ、ジスト様、…そちらの方がもしかして…」

とサファはアメジを見た。そしてジストがサファにアメジを紹介する。

「ああ、そうなんだ。ラルド様は正しかったよ。」

彼女が水晶の聖乙女、アメジ殿だ。」

と、ジストがおおげさに紹介すると、サファはもちろん、周囲の者たちも「おおつ。」と驚いた。

それに気づいたアメジは「んっ」と少し変な顔をしていた。

「おじい様も喜ぶわ。すぐに知らせましょ。」

とサファが後ろを振り返った瞬間、すさまじい声が響きながら、こっちへと近づいてきた。

その声は人ごみを跳ね除けながら、アメジの目の前で止まった。

「おおおつ。族長、そちらの方が聖乙女殿じゃなあつ。」

その声の主は、つるり、と頭のはげ上がった、歳は七十を迎えたばかりの男であった。

「ええ、ラルド様のおっしゃった通り、水晶神殿に…」

とジストが説明をしているが、その男はほとんどそれを耳に入れておらず、舐めるような目でアメジをジロジロと見ていた。その視線は顔よりも、胸元そして下半身、特に尻をしつように見ていた。

「ちょっとー、このジジイだれよっ？」

アメジは露骨に嫌な顔をしながら、一歩後ろへ下がった。

そんなアメジの心中も察せず、ラルドはニタニタしていた。

「アメジ殿。こちらは大神官のラルド様です。」

「大神官？なに、このジジイが？」トパーズ様は？とアメジが問いかける間もなく、ラルドが激しく接近。満面の笑みで迫った。

「おおっ、アメジ殿っ！いやー、ワシの理想どうりじゃ。」

ワシの理想どうりのいい尻じゃー。

このラルドとの出会いがアメジに激しい戦いの道をもたらすことになるのだった。

「よし、祭りじゃ、祭りじゃー。早速始めるぞい。」

ラルドが手を叩きながら言った。周りの者もわー。と盛り上がった。

「ちょ、ラルド様。祭りって…」

族長なのに状況をまったく理解してないジストを無視し、ラルドはアメジの手を掴んだ。

「でっ。なにすんじやいつ、このエロジジイがつっ。」

アメジの拳がラルドの顔にめり込んだ、がラルドはすぐに復活し、またアメジの手を掴むと一直線に駆け出した。

ぎゃーっ。と叫ぶアメジの姿が遠くなるのを、ジスト達はため息ながらに見送った。

ラルドに連れられながらアメジはリスタルの街を見た。やはり違和感をおぼえた。

ラルドが向かった先は、水晶使い達の修行を行う場でもあり、大神官の居住地でもある、街の中央にある広場前の寺院であつた。

そこは、百年前とほぼ変わらず、屋根からはこのリスタルで信仰されている太陽神と、その神の下僕とされる四の精霊が鮮やかに描かれたタンカが掛けられていた。

寺院からは香がただよってくる。中はただっぴろい中央に太陽神のどでかい像が座っている。

アメジにも見覚えのある場所だ。

ただ、あの人がいない…。

「ささー、アメジ殿。中へ……」

「ねえ、トパーズ様はどこよ？」とアメジがキョロキョロと見回していた。

「おお、トパーズ殿といえば、アメジ殿の時代の大神官ですなあ。」

「……ジイさん。のーみそ大丈夫か？」

「アメジ殿、もしやまだ混乱されとるのかな？ ま、無理もないかのう、百年も眠っておつたら。」

ふいーとため息まじりにラルドが同情した。アメジはまだ気づかない。

「あたし、何日寝てた？ 一週間とか？その間にトパーズ様辞めちやつたとか……」

おそるおそるラルドに尋ねた。その問いにラルドは笑顔で答えた。

「アメジ殿、ナイスギャグじゃわ。百年ですぞ。いやー、ワシよりずーっと年上ですわ。」

「…ほんと、大丈夫か、アンタ…」

「アメジ殿、まだ信じられませんか。ほれ、後ろをご覧くださいなされ。」
ラルドはアメジの後ろの壁を指す。

そこには、歴代大神官の名が記されていた。一番端の新しい所に、ラルドの名を確認できた。

じゃあ、このジジイが今の大神官？とアメジも信じざるをえなかった。

そして、トパーズの名を探した。ラルドをずっとさかのぼって、その名を見つけた。

（え、どーゆーこと？　なんでこんな前にトパーズ様の名前が？

百年だ？　あたしまったく老けとらんぞ、あたしが眠っている間にながったのよ？）

「理解できたかのう。ワシも大神官として、古代の書物やら解読しておつてのう。」

アメジ殿のことはこの書に載っておつてのう。」

とラルドが取り出した古びた本をアメジがバツ、と取った。そこには、水晶の聖乙女のこと記されており、黒水晶からリスタルを救ってくれる救世主となる、などと無責任なことが書かれていた。

さらにアメジが驚いたのは、その著者だった。

「オールド……？」

アメジの父オールドの著。

理解不能だった。アメジが巫女になる前に死んだ父が、アメジが聖乙女になることなどわかるはずもないのに…と。

「何だー、これ、どーゆーこつちゃー？」

「オールド殿はたしか、アメジ殿のお父上ですな。ちゃんと調べておりますぞ。」

そのオールド著の本にはたしかに、アメジの名が記されていた。

水晶の聖乙女になるということも。そして、尻がでかいというどうでもいいことも書かれていた。

「ここはほんとに百年先のリスタル？」

さらに、アメジが百年後に目覚め、黒水晶の脅威にさらされているこの時代の救世主となる、などと恐ろしげなことも書かれていた。

「うそだ。オヤジがあたしが聖乙女になるなんてわかるわけないじゃん。オヤジの名を騙っただれかのいやがらせ？」

ちよつと待て。フツーに百年もこのままでいるなんて無理でしょ？」みんなしてあたしをからかい楽しんでる。

そういうアメジにラルドは彼女の尻を撫でながら答えた。

「そう普通なら無理な事じゃ。しかし、アメジ殿だけは百年の時を越えて現代へとたどり着いた。

そうつまり、アメジ殿には特別な力がある。

このリスタルを救う、救世主なんじゃよ。」

アメジにぶつ飛ばされながらも、ラルドは笑顔でしゃべっていた。

アメジは立ち尽くしながらも冷静に考えてみた。

これが水晶の聖乙女の力？百年の時をも越える、巨大な水晶でも身につけたというのか？

街の姿もあの頃となんだが違う。知った顔が一人としていない。族長も大神官も、モンドとトパースでなく、ジストとラルド。

このじいさんの言うことが真実ならつじつまがあう。そこでアメジは気づいた。

「じゃー、ジストはモンドの……」
子孫、であることに。

「おおつ、アメジ殿は族長の先祖と顔見知りじゃったのか。」

「ああ、そうだ。あたしゃーあいつのせいで赤っ恥をー」
忘れかけてた怒りがふつふつとよみがえってきた。

段々と赤くなるアメジの顔もラルドの次の言葉で色がひいた。

「アメジ殿は最後の水晶の聖乙女じゃからのう。」

「へ？最後？」

「おお。長年続いた聖乙女制度もアメジ殿で終わっとるんじゃ。ト
パーズ殿が廃止したらしいんじゃ。」

（トパーズ様が…なんで…？）

その真意は今のアメジにはわからなかった。

「さて、そんな難しい話は後において、祭りじゃ、祭り。」

アメジ殿を歓迎する祭りを行うんじゃよ。」

難しい顔をしたアメジにドカーンとバカ明るくラルドが言った。ア
メジが来るまでに、祭りの準備は整っていた。

族長がリスタル族の長なら、大神官は、水晶使い巫女たちの頂点に
立ち、弟子たちの指導にあたるはもちろん、族長のサポートを務め
たり、水晶の研究や、祭りを仕切るのも重要な仕事である。水晶使
いの長なのだ。

特にこのラルドは、明るい性格も証明するとおり、大の祭り好きな
のだ。おまけにリスタル一の女好きでもあり、その地位を利用した

セクハラも数しれない。さらに尻フェチで、尻のでかいアメジはラルドにとって理想そのものであった。今後もこのジジイにアメジは振り回されることになりそうである。

「さて、祭りに行きますぞっ。アメジ殿歓迎の大祭りじゃー。」

「祭りって…。え、ちよつと、あたしは救世主なんか…。」
面倒くさがりアメジ、とても嫌な予感がした…。

第5話

「祭じゃー！アメジ殿歓迎の大祭じゃー！！」

ラルドの大きな声を合図に人々は集まり、日が落ちる頃には祭りの準備は整っていた。

街の中央に位置する寺院前の広場に、リスタル中の人たちが集い、にぎやかな祭り独特の空気が漂っていた。

広場中央の祭りの時のみに設置する台を丸く囲むように、楽器を奏でる男達に、その内側で踊る娘達。その他観衆…楽器の音、人々の声、広場は祭りの音でいっぱいになった。

祭りだ祭りだとはしゃぐラルドとは対照的に、アメジはがっくりとしていた。

（はあ、なんなんだ、このジジイは……それに救世主ってなんなのよ？

はあ？……てかさ、マジでここは百年後なの？

聖乙女の儀式って…、あたしはただムカツキながら眠っていただけなのに。

わけわからんよ、でもたしかに、だれ一人知ったやつがないし…信じるしかないのか？）

ハアーと深いため息をついて、アメジはめんどくさそうな表情でラルドを見た。逆にラルドは満面の笑みで返してきた。

ラルドがアメジをテント下の席に着かせると、二人のもとにジストがやってきた。

「ラルド様、なにもこんな時期に祭りなど行わなくても・・・。」

「なにを言つとるんじゃ族長。こんな時だからこそ祭りをやってみなのが持ちを高めてやるんじゃないろうが。ほれ、アンタもさっさと

そこに座りなされ。」

そう言つてジストをアメジの横の席にと着かせた。

「さあ、皆の衆アメジ殿のために祭りをおおいに盛り上げようぞ。さあさあ歌えや飲めや踊れや騒げや、ワハハハハ。」

ラルドの合図とともにさらに祭りは盛り上がった。ラルドは大きな声で笑いながら酒を飲み始めた。

「おい、なにしとる！もつと美味しいものを持ってこんか！ささ、アメジ殿どんどんいってください。」

うんざりしていたアメジも、目の前に差し出される数々のご馳走を目にするととたんに嬉々とした顔になった。

「うひょー、いいの？おいしそー。んじゃま、お言葉に甘えていたできます。」

単純アメジ、食事中は悩みなど忘れる主義。乙女であることを忘れ、飢えた野獣のごとくかつくらう。

「おおお、いい食いつぷりですなー。さすがアメジ殿、いい尻をしとるだけあるわ。」

「ぶふおい！！尻は関係ないわっ」

（なんかわけわかんないけど、すっげ美味いんですけど、こんな歓迎初めてなんですけどっ、もしかして族長の妻になれなくても楽しんでるかも？）

アメジの中に新たな道が見えた気がした。

アメジがメシにかつくらっている最中、演奏の曲調が変わり、踊り子達の舞いががらりと変わった。

観衆の視線があるところに集中した。

「おおっ、始まりますぞ、あやつの舞いが。」

ラルドがそう言っ て視線をやった先にいたのは、神の下僕である精霊の面をつけた、他の踊り子とは違った衣装を身に纏った娘だった。「！サファ。ケガは大丈夫なのですか？」

その娘がサファだと気付いたジストは心配げにラルドに訊ねた。

「舞いに支障はなかるう、さあ始まりますぞアメジ殿。」

「ふえ？」

ラルドに言われてアメジは初めて広場中央の舞いの場に目をやった。精霊に扮したサファは曲にあわせてゆつくりと、中央の舞いの台へと登っていった。

巫女は女の水晶使いでもあり、踊り子の最重要踊り手でもある。

巫女であるサファだけが舞うことを許される精霊の舞いは、かすかに体内の水晶を放ちながら舞う特別な踊り。

その踊りの力は、舞いを見るものの気持ちさをさらに高ぶらせることができる。

サファの舞いによって、広場中の人々の気持ちは一体となり、そこはさらに不思議な空気につつまれていた。

その踊りを見ていて、アメジの中のある感情も高まっていた。

「ふむふむ、さすがはワシの孫じゃ。今となつてはあの舞いができるのはあやつだけじゃかるう……」

「ラルド様……」

遠い目をしたラルド、少ししてアメジにこう言った。

「そうじゃ！アメジ殿なら、すばらしい舞いが舞えるに違いない！アメジ殿、ぜひひとつ舞ってはもらえんかの？」

「えっっ！？」

「ぜひとも頼みますわ、アメジ殿。あやつらにありがたい舞いを見せてやってくれんかの？！」

「ちよっ……ちよつと待ってよ……な、なに言い出すんだよ？いきなり……」

アメジ焦る、焦るにはわけがある、

つまりアメジは……。

第6話

「さあ、アメジ殿のありがたきたまらん舞いを見せてやってくださらんかのう。」

酒に酔った赤らんだ顔のまま、ラルドは隣に座るアメジに頼み込む。
「ちょ……ちよつと、いきなりなに……」

焦るアメジ。

「おい、聖乙女殿の舞が見られるらしいぞ。」

近くにいただれかがそう言ったのを合図に周りは盛り上がり始める。聖乙女のありがたい舞、だれも見たい見たいと騒ぎ出した。それそれ。

ヤバイ、たらりと汗が伝い、さらに焦るアメジ。

「さあさあ、アメジ殿、見せてくだされ。演奏はアメジ殿に合わせますからの。」

「あ……あの……ちよつと……今日は調子が……腹が……悪いけど少し向こうで休んでくるわ……。じゃ。」

そう言つて、腹をさすりながらアメジは席を立った。

「な、なんとアメジ殿食べすぎですか？ ややそれは大変じゃ、ワシが腹をさすつて……」

「じゃ、あたしあつちのほうで休んでくるわ、今日はありがとね、ラルドのじいさん。」

アメジはそそくさとその場を去っていった。慌ててアメジの後を追おうとするラルドは、酔いがまわって席を立とうとすればふらついてしまった。

「ラルド様、アメジ殿は私が……」

ふらつくラルドをジストは席に座らせると、アメジの後を追った。

「おお、またんか族長、ワシがアメジ殿の尻をさす……うひいっく」

アメジが抜けた後も祭りは続き、人々は盛り上がっていた。

「はぁ・・・ヤバ・・・踊りなんて、やれるかったの。」

祭りの音から遠ざかった広場を見下ろせる場の階段の上で、アメジはため息をついた。

「踊りなんて、ぜってーやらねえ。」

アメジ、踊りを嫌がるにはわけがあった。

巫女は女の水晶使いでありながら、祭りの大事な踊り手でもある職業。

水晶使いの能力と同様に踊りの能力も巫女には必要不可欠なのだ。

しかしアメジは、踊りがまったく苦手だった。

幼い頃、踊りの下手くそっぷりを周りに笑われていたことがトラウマとなり、それ以来、人前ではなにがなんでもぜったいに踊らないと誓ったのであった。

そんなアメジがなぜ巫女になれたかというところ・・・、親のコネというやつである。

父オールドと親交のあった大神官トパーズは、オールド亡き後はアメジの親代わりと成り、アメジを巫女にしたのだ。

アメジを巫女として鍛えてやるつもりが、アメジのぐうたらぶりは予想以上で、アメジはほとんど巫女の修行をしなかったのだ。

当然踊りなど、一度も練習しなかった。

ゆえにアメジは人前では踊らぬと固く誓っているのだった。

「はぁ、でもあのジジイしつこそう、カンベンしてほしいよ。」

ふう、ともう一度深いため息をついた後、自分を呼ぶ声に気付いた。

「アメジ殿！」

階段を駆け上って、ジストがアメジの前に現れた。

「！う・げ」

「お体は、大丈夫ですか？」

「あ、いや、まあ...でも踊りはきついか？あはは。」

「すみません、みながムリを言って・・・」

「ははは、いーってことよ。なんせ聖乙女ですから（ちょっと調子ぶっこいてる？あたし）」

アメジの様子を見て一安心したジストは、祭りの光に包まれている広場を見下ろした。

「いつ黒水晶が襲ってくるかわからない、いつ何時も気を抜いてはいけない状態なんです。

ラルド様の祭り好きも考えものなのですが……。

アメジ殿の歓迎は、黒水晶を倒した後でちゃんと行いたいと思っています。」

「へへへ、そう？ ま歓迎会は大歓迎だけどさ。」

ジストの視線は広場を見下ろした後は、空へと向かっていた。黒水晶を常に警戒していた。

「そつえば、祭りで巫女の舞いはひとりだけだったけど、他の人はどうしたわけ？」

祭りの様子をふと思い出して訊ねた。

「・・・巫女は、彼女サファひとりだけなんです。」

「へ？」

「他のものは、みな黒水晶に殺されました。

彼女の姉たちであった巫女たちも、多くの水晶使いや聖獣も、黒水晶との戦いに敗れて、リスタルの民のほとんどが黒水晶に家族を奪われ、深い傷を負った。……早くやつを倒し、人々を守る。それが族長としての私の使命なんです。」

（黒水晶に、みんな殺された？・・・ずいぶん皆明るいから、そんなかんじ受けなかったけど、黒水晶ってそんなやばいやつなの？）

「先日唯一の巫女のサファが負傷し、しばらく戦えないと思っていたところ、ラルド様から聖乙女殿のことを聞き、神殿に行ったんです。・・・そして、アメジ殿、あなたは現れた。」

現れたというよりか、正しくはジストによって起こされたアメジ。

「お願いしますアメジ殿！私たちに力を貸してください。」

リスタルの人々の希望の光となっていたきたいのです！」

「うえっ？」

アメジに頭を垂れるジストにアメジは少しとまどった。

それってつまり、あたしにあの

バケモノと戦えって言ってるわけ？

黒水晶……。

アメジが幼い頃、父オルドと遺跡を巡っていた頃、土壁に眠る化石を目にしたことを思い出した。

「うわっ、オヤジ、コレすげーでけーバケモン！」

「ああ、黒水晶だな、こりゃいつの時代かな……。しかしこいつもでけーな。んまあ、俺がやつつけたやつはこの倍だったけなあ？」

むき出しになったその化石をさすりながらオルドは言った。

「ええっ？マジでオヤジこんなバケモノ倒したのか？」

「ああ、マジよ。あのころの俺は、かつこよかったぜえ。ま今は今で輝いているがな。」

アメジ、お前もめんどくさがっていねーで、

かつこいい生き様つての見せつけるかつこいい人間になるんだな。

俺を見習って、な。」

「は？なに言ってるんだよ？バカオヤジのくせによ！」

「は、なにを言うかバカ娘。黒水晶ひとつも倒してねーガキに俺のかつこいい生き様を否定する権利はないってのよ。」

「なんだとームキー！」

父親とバカみたいな口喧嘩を繰り返しながら、遺跡の中を渡り歩いていたあの幼き日々、アメジは思い出し懐かしく、そして……

「くっそー、やっぱオヤジムカつく！」

「へ？」

「ハン、オヤジにやれてあたしにやれないじゃないじゃんよ！

黒水晶なんて三秒でやれるってのよ。」

アメジは握りこぶしを天へと突き出した。空の人となった父オールドにむかっつての挑戦状。

「本当ですか？アメジ殿！」

「へ？」

ジストの声で回想シーンからリアルへと引き戻されたアメジ。

「ねえ、もちろん黒水晶倒したら、ちゃんと歓迎会してくれるんでしょ？美味しいものいっぱいくれるんでしょ？アメジ様万歳でしょ？祭ってくれるんでしょ？アメジ伝説轟くんでしょ？」

「え、ええ…、もちろんですよ。」

興奮気味のアメジに少し引くジスト。

（そっかー、なにも族長の妻にこだわることもなかったんじゃない？
楽しんで生きる道、見つけた！かも）

アメジの返事に喜び、早速ラルドのもとへ報告に向かおうとするジストをアメジは呼び止めた。

「ねえ、ジスト、あんたさ、年はいくつなの？」

階段を七段ほど下ったさきでジストが振り向いた。

「え？…22になりますか？」

「年上じゃん！あの子、そのアメジ殿っていうの止めてくれない？あと敬語も。」

あたしかたつくるしいの苦手なんだよね。」

少ししてからジストが答えた。

「そう、ですか・・・なら遠慮なく。

アメジ、ありがとうよろしく頼む。」

「おう、こっちこそよろしくな、ジスト。」

アメジの中で高まっていた感情・・・それは...

救世主になれば、みんなにちやほやされて、
楽できんじゃん。うぷ
ぷ。

しかし、アメジ気付いていなかった。その矛盾に・・・。

第7話

祭りから一夜明け、アメジはラルドに呼び出され、寺院に向かった。
「ほれいアメジ殿、ふれぜんとふおーゆーvじゃ。」

「はひ？」

そう言つてアメジに差し出されたのは、

手のひらに収まるサイズの、ドクロ水晶だった。

「ドクロ・・・水晶じゃん、なに？なんで？」

「族長に聞いたところ、どうやらアメジ殿はドクロ水晶を持つてないそうじゃの。」

それを聞いてワシが徹夜で（マツハで）作つたんじゃよ。」

「・・・・あ。」

アメジ、昨夜のことを思い出した。たしかにジストに言つた。
黒水晶と戦つと。

「これがないことには戦えんじやる。でアメジ殿のために急いでこしらえたのじゃ。」

愛情をたつぷりと詰め込んで、なv」

「ははは、ありがと。（愛情はいらんけどな）」

苦笑いしながら、ラルドから（愛情たつぷりの）ドクロ水晶を受け取つた。

「さあ、善は急げといいますぞ、まいろうかアメジ殿。」

「へ？・・・はい？・・・」

わけもわからず、アメジはラルドに連れて行かれた。

街を出て、少し登り、山岳神殿に向かう途中の広い場にと出た。

そこからはリスタルの街が見渡せ、アメジのいた水晶神殿へと続く道が分かれている。

そこにはすでにジストとタルがいた。

山脈の向こうを見据えていたジストはラルドとアメジの到着に気付くとそのほうへ振り返った。

「族長、様子はどうじゃ？」

「ラルド様。・・・まだですが、そろそろ、来ると思います。」

「そうたる。この時間はあいつのお昼ご飯の時間たる。」

シリアスな表情の彼らとは反対にアメジは？な表情のまま、状況を理解できずにいた。

「そういうことじゃ。アメジ殿・・・準備はよろしいかの？」

「へ？」

わけのわからないアメジ、もドクロ水晶へと目をやったラルドを見て、なんとなく事を理解した。

「・・・え、ちょ・・・まさか・・・もう？」

汗たらたらアメジ、アメジの不安などわからずこくりと頷く二人と一匹。

まさか、昨日返事で今日かよ？！

いきなり、あのバケモンとヤルっていうの？！

来た！とジストの声で、みな山脈のほうへと目をやった。

アメジたちを覆いつくす黒い影は、あの日、アメジの前に現れた、あの黒水晶だった。

ドス黒い目でアメジたちを確認すると、ギヤアアアーーとガラスを爪でこするような声をあげた。

「ぶっひゃー、でたよ、やっぱでけーな、おい。」

アメジまばたきも忘れ、黒水晶を見て固まる。

「よし、いくぞタル。」

「おっけーたるよ！」

ジストとタル、慣れているのか、冷静に黒水晶を見て、構える。

「まかせましたぞ、アメジ殿！」

「はい？」

気付けばラルドは、アメジたちのはるか後方の岩陰にと身を潜めていた。

（おい、なにひとりだけ安全地帯にいるんだよ?!）

「アメジ！道しるべを！」

「へ？はい？なんですか？道しるべって・・・？」

アメジ、ジストの言っていることが理解不能だった。それにすぐさま反応したのがタル。

「やっぱりこいつボケボケたるよ！ジスト！」

う、う、なんだ？

？な表情のアメジ、ラルドの目線のドクロ水晶に気付く。

そうか、これ、ね。

ラルドに目で合図を送ると、ラルドこくこくと頷いた。

このことか・・・しかし・・・どうやって使うんだ？これ

・・・みな期待の目線にアメジ汗出る・・・。

ヤバイ、決めないと、かつこいい生き様を・・・オヤジじゃないけど（恥）

ごくり、アメジ決意。

左手に握り締めたドクロ水晶を天へと掲げた。

「くらえー、黒水晶ー！やあ！」

と叫んだ……。

「はい?!」

がうーん……という切ない効果音とともにジスト、ラルド、タルの切ない声がした。

その反応に、アメジまたしても汗。

「あれ……?なんもおこらねえ……
ちーん……。」

「あいつ、やつぱ……ダメダメたる。」

はぁ、とタルおもいつきりあきれてジストを見た。

「もしや、アメジ殿……眠りすぎてドクロ水晶の使い方を忘れてしまったのかのう?」

??な表情ながらも、アメジにまだ期待の表情を送ってくるラルドに、申し訳なさそうにアメジは

「いや、ていうかあたし……初心者……なんですけど。」

自分のほっぺのかわりにドクロ水晶をぽりぽり。

がくーんとするジストとラルドに、こいつほんとにダメたる。と殺意さえ露わにするタル。

「アメジ殿……マジですか……の?」

第8話

アメジは初心者だった・・・。

ろくに巫女としての修行をつんでおらず、当然というか、ドクロ水晶の使い方もわからなかったのだ。

「あーもーつかえねーたるつつ、お前やっぱニセモンたるよ!」

ブチキレて背中毛がぶわっと逆立つタル。

まさか、という表情のジスト。

すまんすまんとアメジ・・・。

ちーん・・・さみしい空気の流れる中、こちらの都合などおかま
いなしに、空中の黒水晶は大きな口を開けたまま、アメジたちへと
迫って来た。

「アメジ殿!危ないですぞっ」

「うひっ」

反射的に左方向へと飛び込んで、黒水晶の攻撃をかわしたアメジ。

アメジたちを横切った後、また空へと高く舞い上がる黒水晶。

やつがこちらへと向き変える間にとラルドが叫んだ。

「むむむ、しかたないのう。」

アメジ殿、ワシが使い方を教えますからの、その通りにやってみて
ください。」

岩陰から顔をのぞかせながら、ラルドが言った。

「えっええ・・・わっわかった・・・(ぶっつけ本番かよ?)」

すう、と息を吸って、心を落ち着かせるアメジ。

ええい、やるっきゃねーな、やってやるーじゃん
楽できる人生のために！！！！

「よしっ、いいよラルじい！」

きりつとラルドに答えるアメジ。

「では、アメジ殿、ドクロ水晶を片手に構えてくだされ。」

「おおっ、こう？」

アメジは右手にドクロ水晶を持った。

「で体内の水晶をそのドクロへと集めるのじゃ。

大事なのはイメージですぞ。水晶の流れをイメージですわ。
水晶をそのドクロへと集めてみなされ。」

「ドクロに水晶を集める??」

とりあえず目を閉じて、イメージしてみる。

気持ちを右手のドクロにと、力をこめて、集まれと集中してみる。

「むむむむ。」

そんなアメジの様子をあきれながら見てるタル。

「いきなりできるわけないたる。・・・あいつに期待するだけ損
たるよ。」

「タル、いいから準備するぞ。」

ジストはアメジの道しるべが来ることを信じ、右手に水晶を集め始
める。

そしてタルも戦いへと集中を始める。

「タルはジストについていくだけたる。」

集中力。ここぞという時の集中力はアメジはかなりのものだった。
ドクロ水晶が輝き始めた。ソレを見て一番驚いたのが本人。

「おおつ、光っているよドクロ！」

「アメジ殿、そのままを保つんじや、それでもう片方の手で、ドクロ水晶を触れてみなされ。」

「こう？」

アメジは左手人差し指をドクロのおでこにあたる場所にちゃんと触れてみた。

「ドクロから指を離して、線を描くように水晶の光の線を描くのじや。」

ゆつくりと左手の人差し指をドクロから離すと、

ドクロより流れる光の線が、アメジの左手人差し指にて描かれていく。

「わわ、すげー、描けたよ。」

喜ぶアメジ、するとふっと線が途切れ、ドクロの輝きも消えた。

「あれ？」

「アメジ殿、常に集中、水晶を放出し続けるんじやよ、もう一度。」

「おおっおっけー。」

再び、集中、アメジ、水晶の流れをイメージするのは得意なのか、

それともこれが聖乙女の力なのだろうか。

コツをつかんだアメジはノリノリで光の線を描き出した。

「よし、いいぞ。」

「ふん、それくらい巫女ならできて当たり前たるよ。」

「で、どーすんの？」

「アメジ殿、線が途切れぬよう、常に水晶を出し続けることを忘れないように、

で、その線が聖獣の大事な道しるべじやからの、

黒水晶へと向かう光の道を描くのじや。

やつは直線の動きには敏感じゃから、できるだけ曲線を描くのじや、

螺旋を描くようにの。」

よしっ、とアメジは答えて、光の線を空に描きながら、走った。

ジストとタルの周囲を走りながら、光の線を描いていく。

「なかなか力強い水晶の道じゃ、さすがアメジ殿。」

ギャアアー、アメジたちへと向き直った黒水晶の次の攻撃が来る。

「アメジ殿、その光を黒水晶へ向かうようイメージじゃ。ボールをやつ目掛けて投げるようにイメージすると思いますぞ。」

「おっしゃー、いつけーい。」

左手から、ボールを投げるようなフォームで、光の線を黒水晶へと放った。

第9話

アメジの指より放たれた光の線は、空中で羽ばたく黒水晶へと向かった。

それと同時に、ジストの手より放たれた水晶を受けたタルは、輝く光の兵器となり、

アメジの描いた線の上を駆けるように、凄まじいスピードで黒水晶へと向かった。

確実に黒水晶の死角から攻め込むことができた。

光の兵器と化したタルの体当たりによって悲鳴を上げる黒水晶。

タルが黒水晶へと到達したと同時に、アメジが描いた光の線は消滅した。

黒水晶へと一撃を与えたタルはジストのもとへと戻ってきた。

ジストは再びタルに水晶を放ち、アメジの道しるべを待つ。

「アメジ殿、また同じ繰り返しですぞ。」

「よし、なんかコツつかんだかも、任せて！」

調子こいてはりきるアメジ、再びドロクロより光る水晶の線を描いていく。

大地を蹴りながら、駆ける、跳ぶ、大きく曲線を描きながら、

ジストたちの周囲を、土壁を駆け上がり、空高く舞いながら、弧を描いていく。

力強く大地を蹴るアメジの足によって砂煙が舞い上がった。

さあ、いっけーい。と指先の水晶を、光の線を、黒水晶へと再び放った。

同時に光の道を翔る光の生物、アメジ、ジストとタルの連携の繰り返し、

何度も黒水晶に打撃を与え、そのたびに黒水晶は悲鳴にも似たあの

耳に障る声をあげた。

「それにしてもあんな戦い方する巫女初めて見たたるよ。サファとは全然違つたる。」

「ああ、なんて力強い舞なんだ。・・・しかし、水晶の量の調整が気になるな。」

あれでは体が持たないんじゃないや・・・。」

何度か打撃を与えたが、それでも巨大なバケモノは特に外傷もなく、戦いは長期戦になるかと思われたが、
またしても黒水晶はなにかに呼ばれたかのように、ギャアアーと鳴くと、山脈の向こうへと飛んで行った。

黒い影が去つたと同時に、アメジは急ブレーキがかつたように止まり、その場へと倒れこんだ。

「アメジ殿、大丈夫ですか？！」

安全とわかるとすぐラルドはアメジの元へと駆けてきた。

「V?・・・」

「おお、もちのろんじゃよアメジ殿、Vですじゃ。」

やつりー、よっしゃーと叫びたいアメジだったが、立ち上がる事ができなかった。

「あ、あれ？なんか体変なんですけど・・・?」

体力には自信のあつたアメジのだが・・・。

「アメジ殿、水晶の量をコントロールする力が、いまいちのようですな？短期決着方の戦い方でしたぞ？」

「はひ・・・?」

アメジ、ろくに巫女の、水晶使いとしての修行をつんでおらず、当

然の結果かもしれないが、
とりあえず、ぶつつけ本番であったアメジの初バトルはなんとか成功に終わった。

「おお、アメジ殿、なかなかよくなりましたぞ。」

「うん、なんかわかってきたかも、やば、やっぱ天才？あたし」

「いやいやまさにそうですね、アメジ殿は生まれ持ったの強い水晶の持ち主のようですからの。やはり救世主なんじゃ。」

ラルドはひたすらアメジを褒めまくる。そのたびにアメジはいやー、当然でしょ。とうれしげに鼻高々。

あの戦いの後、アメジはジストの勧めもあって、ラルドの元で水晶コントロールの修行を受けていた。

寺院の中で親切丁寧に教えを受けるアメジ、たまにラルドにケツをさすられ、そのたびにラルドに飛ぶ鉄拳、そしてまた修行、を繰り返していた。

「ジジイ、ヨイショしすぎたる。あいつはおだてられるとますます調子に乗るタイプたるよ。」

「たった数日であれだけの上達・・・頼もしいな。アメジがいれば、あの黒水晶も近いうちにきつと倒せる。」

こっそりと様子見にきていたジストとタル。アメジの様子に期待の表情を見せるジストと対照的に不安げなタル。

「まあ、どんなアホでも強ければ文句ないたるけど、ジストとタルの足をひっぱらなければ。」

そう言ってアメジに意味深なウインクをして寺院をあとにした。

その日、ラルドのもとで修行を終えたアメジ。

寺院から出ると空にはもう星空が広がっていた。

寺院を振り返り、アメジの中にふと思い出された顔、それは……。

「トパーズ様……。」

本当ならアメジの師はトパーズであった。しかし、アメジはろくに修行を行わず、トパーズの言うことを聞かず、いつもモンドと遊んでばかりいた……。100年前……。

だが、アメジの記憶の中ではついさっきまでの記憶だった。

「はは、変なカンジだな。本当ならあたしはトパーズ様に教わるはずだったのに……。」

ま、ラルじいには感謝だけだね。

エロいのは問題だが……。」

ふう、と息をついて空へと目をやったあと、ふと街中にむけた目に飛び込んできたのは、

夜風になびく白い髪、月夜に照らされたその後姿の人にアメジの目にはあの人が映った。

「トパーズ様?!」

アメジはその人を追った。

ここは百年先の世界

アメジの知る人は誰一人いないし、いるはずがない

でもまさか、もしかしたら、という思い

もしかしたら幻を見たのかも？

それでも・・・

かすかな望みがアメジを走らせた。

階段を駆け上がり、リスタルの街の一番高い場所まで出た。

その影は、街の外へと消えた。

アメジもあとを追って、外へでた。

真つ暗な山道を登り、最近黒水晶と戦った広い場へと出た。

そこからさらに、アメジのいた水晶神殿へとむかう道の途中、

アメジの耳に入ってきたのは、楽器の音……。

「笛？」

そしてその笛の音に乗せて流れてきた唄い声。

その音の方向へと歩みを進めるアメジ。

そしてアメジの向かう先にいたのは……

笛を吹く白い髪の男と、その傍らで笛に合わせて歌っているタルよりも一回り小柄な聖獣だった。

男はトパーズではなく、アメジと年の近そうな若い男だった。

アメジに気付いた聖獣は唄を止め、大きく丸く揺れる瞳で、じつと

アメジを見た。

歌がやんで一秒後、男は演奏を止め、アメジのほうへと向いた。

「だれだ？お前。」

こちらが問いかけるより先に問いかけられたアメジ。

月明かりと同じ光を放つ瞳に睨まれ、お前こそだれだよ！？とつつこむ事を忘れたまま、しばし立ち尽くしていたのだった。

第10話

「ぷひー、もうお腹いっぱいなんだけどー。」

もう、みんなさあ、アメジ様万歳アメジ様万歳っていいすぎ！

ああ、きらめき憧れのアメジごて・・・んごおっ」

「いつまでだらだら寝てるたるか？！ぐうたらアメジ！」

激しいタツクルを受け、ベッドから転がり落ちるアメジ。

いってー、とむくりと起きるアメジにどすんとタルがのっかった。

「おもっ、ブタ聖獣が、ここに・・・」

「うつさいたる！さあ、行くたるよ！」

午前七時に起こされたアメジは、今日もタル、ジストとともに街の外から黒水晶の警戒にあたる。

アメジは住む場所をラルドより与えられていた。寺院すぐ側の二階建ての小さな家で、アメジ的に少し不満だったが……。

そのうち超豪華なアメジ御殿を建ててもらったという野望でいっぱいなアメジはとりあえず我慢していた。

樂できる人生のためなら、なんだって我慢できるし、やってやるさ。とわけわからんことを思いながらだ。

前回と同じ場所で黒水晶を撃退、今回も同じように山脈むこうへと引き上げていった黒水晶。

「今日も逃げられちゃったね。ああ、くそ、あと一息ってかんじなのじゃ。」

アメジもあの戦いからずいぶんとバトル慣れしていた。

ラルドの特訓の成果もあるが、実戦で伸びるタイプであるようだ。

「けどダメージは蓄積されてるはずたる。次こそはいけると思うたるよ。」

「そうだな、それに最近被害が出ていない。」

「そういえばそうたるね。とタルが頷いた。

最近、黒水晶による死傷者がまったく出ていなかった。

いつもこの場で撃退できていたのだ。

「それってあたしのおかげだったりしてね。」

「違うたる！タルとジストのコンビネーションたるよ！お前はすぐ調子に乗るたる！」

こないだまでドクロ水晶の使い方もわからなかったくせに。」

タルはアメジにつっかかるが、タルはアメジの水晶に戦いの中で絶対の安心感を感じるようになっていた。ジストの水晶をうけ光の兵器となった状態の自分を導いてくれる力強い水晶に、その身をまかせられた。戦いの中で、アメジとタルは信頼関係を築いていた。

ジストも、族長として常にみなを引っ張ってきた立場であったが、戦いのとき、気づけばアメジに引っ張られている瞬間があることに気づいた、

そして頼れる背中というのを数年ぶりに意識した。・・・自分を引っ張ってくれた力強いあの遠き背中を、それは戦いの中に安心感を与えてくれた。

アメジの戦闘での集中力は自分を超えているのではとも感じた。

その分、普段はそーとー気が抜けているのだが・・・。

山道を下り、街へと入った三人をサファが向かえてくれた。

「お疲れ様でした。」

「サファ、出迎えありがとう。」

「ええ、私も次からは一緒に戦いますわ。もうケガも癒えたし」
そう言つてサファはジストに元気そうにアピールした。

「そうか、それはよかった。じゃ、私はこれから会議に向かうから・
・・」

「じゃ、タルはさきに帰つてまつてるたるね。」
と街についてすぐ解散となった。

「あ、アメジさん、おじい様から、今日の修行はお休みだそうですよ。」

「へ、そうなの（よっしゃ、帰つたらだらだらけられるぜ）」
ジストの背中を見送つたあと、心配げな表情でサファはアメジに訊ねた。

「あの、アメジさん・・・ジスト様の様子どうでしたか？」

「へ？なにが？」
「疲れていた、とか、ムリしていたかんじとか・・・なかったですか？」

「へ・・・、別に元気だったけど・・・。」

「そう・・・。」

アメジの返事を聞いても不安な表情のままのサファ。

「なに？あいつ、どうかしたの？」

「ええ、その、ジスト様すごく族長としての責任感の強い方だから、みんなのためについていつもムリしたり、なんでも一人で背負い込んだりつてところがあるから・・・連続で黒水晶と戦つたり、おじい様のワガママ聞いたり、族長の仕事だつて毎日あるのに、疲れていないほうがどうかしてるわ。」

ジストはみなのためなら、自分の気持ちなど後回しにしてしまう。
そんな性格だから余計心配なのだと。

「ああ、たしかに、あいつのだらけてるところなんて一度も見たことないしね。」

・・・そのうち過労死するんじゃないの？がんばりすぎてなんて・・・」

「そんな」

「あつ、冗談だつてば（汗）いや、あいつ丈夫だし、水晶も強いし、心配することないつて。」

「ええ、でも、せめてジスト様の代わりに戦える水晶使いの人がいればと思うんですが・・・」

「そういえば、ジスト以外に戦っている水晶使いがいなかったな。」

「なんで？あいつの他に戦えるやつっていないの？」

「そういうわけではないんですが、有力な水晶使いはほとんどの方がもう亡くなられてしまって・・・あとは戦えない体になってしまったり・・・」

ジスト様並の水晶使いは、いなくなってしまったんです。

若手の水晶使いはおじい様が許可を出してなくて、戦えないんです。だから、今ともに戦えるのがジスト様だけで。」

ふーん、若手でも使やーいーのに・・・まさかラルじいのジストイジメ？？なわけないか。

「じゃー、結局はジスト一人に頑張ってもらうしかないんじゃない？」
そうアメジに言われてがくーんと俯いて考え込むサファ。

「・・・ジスト様の代わりに戦える水晶使いがいれば・・・」

あ・・・もしかしたら・・・」

早く帰ってごろごろしようと思つて家路に帰ろうとするアメジを、なにか思い出したサファが呼び止めた。

「心当たりが、ひとりいます。」

「は？」

帰ろうとしたアメジをサファは駆け寄つて止めた。

「あの、アメジさんにお願ひがあるんですが・・・」
「はひ？」

「その人のところをお願いにいつてくれませんか？」

（ちょっと、なんであたしが・・・？）

「お願いします、アメジさん！」

どーするー・・・らららー・・・そんな瞳でアメジに頼み込むサファ。

ラルドに世話になっている身のアメジ・・・しゅしゅ引き受けることになったのだった。

第11話

サファからジストの代わりに戦える水晶使いを連れてきて欲しいと頼まれたアメジ。

「で、だれなの？その人は。」

「え、あの、実はジスト様の弟である人なんですが・・・」

「へ？ジストの弟？いたことも知らなかったんだけど。」

「ええ、というのも、その、私ももう十年以上お見かけしてないというか・・・」

幼い頃、お父様である前族長から水晶使いとして育てられていたはずなんです、

今はどういう状況なのか、私も、知っている人もほとんどいないというか・・・」

「へ？なにそれ、ジストの弟なんですよ？」

「ええ、そうなんですけど・・・その、

もう十年以上も家に引きこもっているらしくて・・・よくわからないんです。」

は？・・・十年以上引きこもっているジストの弟？なんなんだよ？そりゃ・・・

「ものすごく気難しい人らしくて、だれが訪ねても絶対に会わないらしいんですよ、でもきつとアメジさんなら・・・」

「なんであたしなら？」

「水晶の聖乙女・・・ですし、はい、きつと会ってもらえるんじゃないかと。」

なんだよ、その理由はわけわかんねー。

「んー、とりあえず行ってみるけど、ダメだったら諦めてよね。」
「ほんとうですか?! お願いします。」

めんどくさいのは嫌いだったが、これも来るべきアメジ祭に備えてアメジ信者を増やしておくのも悪くない、アメジの脳内では黒水晶を倒した後に行われるであろう祭、アメジ感謝祭を妄想していた。

サファに聞いたとおり、そのジストの弟が住むといわれている場所へと向かう。

中央広場からずっと上、ひたすら階段を登り、街の外に出る一歩手前、左手方向に向かい、住居が立ち並ぶ路地を抜け、行き止まりかと思えた場所からさらに続く細い道、人気のない、なんだか昼間なのに日のほとんど通らない寂しげな場所、その奥に一件だけ立つ古くて寂しげな家屋があった。

「ここか……、てマジで人住んでいるのか?」

疑い眼ながらもアメジは戸を叩いた。

「ごめんくさーい、みんなの人気者聖乙女のアメジさんですけどー……いらつしやるかしら?」

2、3度戸を叩いたアメジ、しかし、まったく反応がなかった。

やっぱ、いないのか……。諦めて帰ろうかと思ったアメジは、曇った窓の奥に、動く影を見つけた。

「いるんじゃない? くそ、アメジ様に居留守ぶっこくとは……。あれ? ……開いた。」

カギをかけ忘れていたのだろうか、それともカギが壊れていたのだろうか、戸が開いた。

そのままアメジは進入した。

「お邪魔しま・・・おつ。」

入ってすぐアメジが目にしたのは大きな本棚に、ずらりと揃ったたくさんの書物、部屋中にもたくさんの書物が転がっていた。

目に映るは本ばかりであつたが、古びたテーブルの上には小さな袋に入れられたクッキーらしきものが置いてあつた。

「ん？これクッキー？・・・くんくん。」

手にとって食べられそうなのかと匂いをかいでみた。

「そ、それ・・・マリンのでちゅ・・・」

「ん？」

アメジの足元から、なにか声がした。

アメジが視線を落とすと、そこには小さな聖獣が、体をふるふると震わせながら、アメジを見ていた。

「はうつつ、なに？このきやわゆい子はつつ」

アメジの目にとってもぶりていーに映ったその聖獣を触ろうと、アメジはしゃがみこんだ。

「ん・・・ちみ・・・そういえば・・・」

アメジ、思い出した。アメジはこのこに以前会っていることがあるような気がした。

そういえば、神殿に向かう途中の道で会った、月夜の下で唄っていたあの子だ。

「みゆ？！・・・あのときの・・・」

そのこもアメジを思い出したらしく、さらにまん丸な瞳をしてアメジを見た。

ああ、なんてかわいいの？！でも、なんでこのこがここにいるわけ？・・・あれ？・・・まさか・・・

まさか・・・アメジがそう思ったとき、

「だれだ?!勝手に人の家が上がってなにしているっ?!」

激しく隣の部屋のドアが開いたと同時に、アメジは怒鳴られた。

「あのねー、あたしは何度も呼びかけた・・・て・・・あ」

アメジ、その相手と目が合って気がついた。

「あ!お前、あの時の」

相手も気がついた。

あの夜の、アメジがトパーズかもと勘違いした、白い髪 of 笛吹き男だった。

あの日は月明かりの中だけで、はっきりとは見えなかったが、この男の容姿、他のリスタルの男とは違っていた。

アメジとほぼ同じ年頃に見えながら、老人のように真っ白な髪。血管が透けて見えそうなほどの白い肌。瞳の色素もとても薄く、黒い瞳、茶色い瞳が当たり前なりスタル族には見られない、金色の瞳をしていた。もう片方の目(左目)はさらに色素が薄く見えたが、気にしているのか長く伸ばした髪の毛で隠していた。

健康的なジストの弟とは思えないほど、華奢な男だった。

こいつがジストの弟?・・・というか水晶使い??

激しく疑いの眼を向けるアメジを、男はキツ、と睨んだ。

不法侵入者め。と敵意を露わにしてくる男を無視して、アメジは小さな聖獣へと向き直った。

「このクツキー君のなの?好きなの?クツキー」

「みゅ。」

かわいいー!と変態くさい顔で聖獣をなでなでするアメジにさらに男がキレる。

「!!おい、マリんに触るな!!」

「へえ、マリンちゃんっていうのか」

「くっ、なんだこの女。」

明らかにアメジに不快な表情のままの男、それを不安げな顔で見上げる小さな聖獣。

「そうそう、頼まれごとだ。アンタがジストの弟？」

「は？それがどうした？」

「水晶使いなら、一緒に黒水晶と戦ってほしいんだけど。」

今ならこの聖乙女ことアメジ様と一緒に戦えるというありがたいキヤンペーン中だけど、どうよ？」

イラついた男に対して挑戦的に言うアメジ。

聖乙女・・・？と眉間にしわよせる男、みゆ！となにかを感じ取った表情を見せる小さな聖獣。
しばらくの沈黙が続いた後、男から放たれた言葉は……。

「うるさい！でていけ！クソ女!!」

「ぎゃん!!」

バン！

アメジ、追い出されてしまった。

第12話

「なんだ、あいつは、ムカツクなープリプリ！」

くそー、しかもケツ蹴りがったよ、あんちくしょう…いたた。」

アメジ、階段を下った踊り場でケツを擦った。

しかし、ケツデカが幸いか、実は言うほど痛くはなかったのだ。

あの無礼男がジストの弟・・・同じ兄弟でここまでも違うのかと呆れながら

「あいつ将来は絶対に頑固ジジイになるね、なりまくるね。

まったく、それに比べてあのきゃわいこちゅわんわ・・・」

ほんわわわ・・・アメジ、あの小さな聖獣マリンのかわいさを出し、変態くさくにんまりとしていた。そしてケツを擦る。

「まって・・・くだちやい・・・ちえいおとめ・・・ちやま・・・」

アメジのケツを擦る手が止まった。アメジの背後から聞こえるこの声は・・・

「あつ、ちみは」

アメジの側まで一生懸命走ってくる、息を切らせながら、アメジを呼び止めたのは、

さつき出会ったマリンだった。

「マリンちゅわんvv」

でへでへとアメジはしゃがみこんだ。

変態顔のアメジとは対照的にマジメな顔のままマリンが言ったのは

「あによ・・・おねがいがあるでちゅ。」

「なあに？なんだい？遠慮なしに言ってごらん。」

「マリンもくろついちようとたたかうでちゅ！」

「え？はい？」

マリンも黒水晶と戦う・・・ですって？！

「え、ちょ、マリンちゃん？まさか、あいつに、お前が代わりに戦って来いくつくく・・・とかつて命令されたの？！」

おのれ、あの男、どこまでも腐ってやがる。

あたしのケツ蹴ったし（怒）」

「ち、ちがうでちゅ！アクアチャまはだれよりもやちゃちいひとでちゅ！」

「へ？」

ちっちゃいながらも必死に訴えるマリンにアメジは少し驚いた。

「みんなアクアチャまのことかいちてるんでちゅ。マリンがいじめられてるときたちゆけてくれたんでちゅ。あと、いちゅもやちゃちいでちゅ。これもマリンのためにちゅくつてくれたでちゅ。」

「え、この首輪？」

そうでちゅ。とマリンがごくくくと頷いた。マリンの首にかけられていた小さなドクロを模ったストーンアクセサリだった。どうやら手作りらしい。マリンの宝物だと語った。

「アクアチャまはくろついちょうのちえいでちゅつとくるちんでいるんでちゅ。」

だからマリンはくろついちょうたおちて、アクアチャまたちゆけたいんでちゅ。

くろついちょうたおちたら、きつとアクアチャま、ちあわちえになれるとおもうんでちゅ。」

真ん丸い目をつるつるさせながらも、アメジに必死に訴えるマリン。

「マリンちゃん……」

なんてかわいくて一生懸命でいいこなの？！

こんなマリンちゃんにここまで言わせるあのアクアって男何者なのさ？

こんな小さな体で、あいつのためにあんなバケモノと戦いたいと言ったマリンちゃんの気持ち、ムダにしたいくない。

「マリンちゃん、ありがとう、なんていい子なの？うれしいわ。」

そう言つてアメジ、マリンをひしつと抱きしめた、直後、

「ああつ、マリン！早くそいつから離れるたるよ！」

アメジのケツにまたしても蹴りがっ！！

「どわっちゃー。」

すっころぶアメジ、デカイケツがますますでかくなつてしまつ。

「ちよつ、なにすんのよ？！タル！」

アメジが振り返ると、ふんぞり返つたタルがいた。

「あ、おねーたん。」

え？おねーちゃん？？？

「マリン、こいつに近づくとアホがうつるたるよ。」

「えええっ？？おねーちゃんって・・・タルがマリンちゃんのお姉ちゃん？？？」

どびつくりアメジ、ふたりをきよろきよろと見比べる。

そうたる。そうでちゅ。

アメジ、まだ混乱中。

「うそだ、こんなぷりきゅーなマリンちゃんとモチ顔タルが姉妹なんて、どー考えたってありえない・・・。」

「お前やつぱり失礼たるっ！」

ぷりぷりするタルだが、いつものことなのでしかたないとアメジを無視して、マリンへと向き直つた。

「マリン、最近どこ行っているたるか？タルが出かけている間はおうちでおとなしく待っているって言ったたるよ。」

「みゅ。」

「ウワサではお前があの変なやつところに出入りしているって聞いたたるけど、

絶対に行っちゃだめたるよ！」

「アクアちゃまはへんなやちゅじゃないでちゅ！！」

「アクアちやまのわるくちゆうおねーたんなんかきらいでちゅー！」
泣きながらタルのもとを走り去るマリン。「こらー、マリン待つた
る！」タルが呼んでも振り返らず去っていった。

「・・・いつたい、そのアクアってどんな奴なのよ、マリンちゃん
のあの反応ただごとじゃないでしょ？」

「タルもよく知らないけど、ろくなウワサ聞かないたる。」

「リスタルのため命はっているジストとは大違いたるよ。」

「どうやら、そのアクアという男、みなからあまりよく思われていな
いらしい。しかし、マリンだけはあの態度、なにかあるのだろうか。」

「あつ、アメジ、お前もしマリンがあのお男に会いにいかうとしてい
たら止めてやってほしいたるよ。マリンはタルのたったひとりの妹
たる、なにかあつたら困るたるよ。」

タルはタルでマリンのことを想っているのだった。

「どうやら周りからよく思われていない、族長ジストの弟、十年以上
引きこもっている、マリンだけは優しいという……。」

「なにかありそうなその男アクア、アメジはなんだか気になった。」

その夜、水晶神殿へと続く山道に向かう影があった。

ひとつは男の影と、もうひとつは小さな聖獣の影、

アクアとマリンだった。

「どうやら彼らにとって、夜の散歩は習慣であつたようだ、いつもの
ルートを進む。」

「いつもと同じ、静かな夜の時間……のはずだったが、それを遮
るものが現れた。」

「かわいいあのこと〜ラブラブランデ〜ブ〜」

「なんだ？この耳障りな唄は？！」

「あっ！」

アクアが睨みつけた先にいた影は・・・

「アメジちゃま！」

「マリinchゅわ〜んvv」

マリンに向かってアメジ投げキッス。

「なんでお前がここに？！」

またしてもアメジに敵意ギンギンに睨むアクアに、またしてもフフと挑戦的に睨み返すアメジ。

その二人の間でキョロキョロとするマリン。

「アンタから我が愛しのマリンたんを奪いに来たのよ。」

「はあ？！」

「みゅ？」

月が見守る中、アメジVSアクアという奇妙な戦いが始まったのだ。

第13話

「さあ、マリンちゃんを渡してもらおうよ。」

「フン、ふざけるな！お前なんかマリンは渡さん！」

さらにアメジを睨みつけるアクア。

「なに？そんなムキになるなんて・・・。」

マリンちゃんはアンタのなんなのさ？え？」

「う、マリンは・・・。」

アメジの問いかけに口ごもるアクア、そんなアクアを真っ直ぐな眼で見つめるマリン。

マリンは・・・マリンは・・・俺の・・・

瞬間、アクアのアメジへの口撃が止んだ。

アメジはアクアの気持ちを確かめるように、口撃を続けた。

「ぶつまさか、たったひとりのお友達なんて言うんじゃ・・・。」

「なっ、ちがつ」

「マリンちゃんは聖獣なのよ、水晶使いと共に戦うのが使命なんじゃない？」

「なんだと？！勝手なことを言うな！あんなバケモノとマリンが戦えるわけない！」

「マリンちゃんはちゃんとわかってんのよ。そしてあたしに言ったのよ、黒水晶と戦いたいってね。」

「なんだと？マリンがそんなこと言うわけないだろ？臆病なマリンがあんなバケモノと戦いたいなどと……。」

「ほんとうでちゅ。」

マリンの答えにアクアは驚いた。

「あいつに脅されているのか？」

マリンの答えが真実だと思えないアクア。

「ちがうでちゅ。マリンがきめたでちゅ。」

マリンくろついちょうたおちゅでちゅ。ちょちてアクアちやまにおんかえちちゅるんでちゅ。」

「お前はあのバケモノがどれだけ恐ろしいか、わかってないんだろ？だから……」

マリンの答えに頷こうとしないアクアにアメジがキレた。

「わかってないのはてめーのほうだっつ！」

「ふがつつ！？」

アメジの助走をつけた鉄拳によってアクアはぶつとばされた。

「ああっ、ぼうりよくはだめでちゅっ」

「マリンちゃんね、アンタのために黒水晶を倒したいって言ってきたのよ！」

こんな小さな子が……アンタを救いたいがためにつて。

小さな体であるバカデカイバケモノと戦いたいって……。

アンタ、あたしよりこのこのことわかってるんじゃないの？

なのに、なんで……。

マリンちゃんのせいっぱいの勇気がわかんねーんだよ？！」

「わかってないのはそっちのほうだ。黒水晶となんて戦えない。マリンは幼すぎる、聖獣としての力なんてないに等しい。」

それに、マリンを扱える水晶使いがどこにいるんだ？」

諦めに似た目で答えるアクア。

そんなアクアを真ん丸い目でじつと見るマリン

「アンタじゃないの……？違うの……？」

アメジはアクアに答えを求めた。アメジの欲した答えがもどつてきてほしいと思いながら、アクアの目を見た。

「俺は………」

「……アクアちゃま」

俯いたままのアクアの口から出た言葉は

「違う。……俺は水晶使いじゃない。戦えない。」

アクア自身の口から自分は水晶使いじゃないとでた。

サファの情報では、幼い頃に父親から水晶使いとして育てられたと聞いていたのだが……。

そこにいたのは先ほどまでアメジに敵意むき出しにギラついていた男とは別人のように、静かにうなだれたままのアクアがいた。

おそろしいほどにか弱く映ったその魂に、アメジは再び握っていた拳を下ろした。

「じゃ、しかたないか。ラルじいにも聞いてみてマリンちゃんのパートナー務まる水晶使い探してみるか。いこ、マリンちゃん。」

アクアのよこを通り過ぎ、マリンを胸に抱いて、アメジは山道を下りだす。アメジに抱えられたまま、アメジの肩から顔をのぞかせ、アクアへと振り返るマリンは小さな声ながら、叫んだ。

「アクアちゃま！マリンじゃえったいくろついちよたおちゅでちゅ。ちやから、あんちんちて！」

マリンは小さいながら決意を秘めた強い目で、そしてかすかに潤んだ瞳で、遠ざかるアクアの姿を見つめていた。

深まっていく夜の中、冷たい土の上にアクアはじっと座ったままでいた。

アメジにぶたれた頬がまだ熱く、じんじんと痛んだ。

「なんで．．．死んだのに．．．」

その痛みは懐かしくも苦しかったあの記憶を呼びさました。
忘れ去りたい記憶、消してしまいたい過去。

アクアにとっては黒水晶以上の恐怖であったかもしれない、その存在．．．

「親父．．．」

もうこの世にはいないその存在、

だがアクアの中ではまだ消え去ることのない巨大な冷たい壁。

十年前、アクアが引きこもることになった大きな原因、
なにより逃げたかったその存在を激しく思い出させてしまった。

「あの女．．．」

ぎゅっと唇を噛むアクア、じわっと口に広がる血の味。

いきなり自分の前に現れて、マリンを奪った上、体をまっぴたつにされたかのような衝撃をアクアに残したアメジ。

そしてアメジとの出会いがアクアの人生を、全てを変えていくのである。

第14話

「連れてきたよ」

「・・・連れてきたって・・・アメジさん、マリンちゃん？」

サファの前にアメジはみゆっ。とマリンちゃんを差し出して見せた。

「あいつの代わりにマリンちゃんが戦ってくれるって、ね。」

「はいでちゅ。」

ええっ?!、困ったままの表情でサファはため息をついた。

ジストの代わりに戦える水晶使いを求めているのに、

こんな小さな聖獣が代わりだなんて・・・（泣）

「聖獣と水晶使いは、水晶の相性が第一だから、

マリンちゃんと合う人がいるかどうか調べてみるわね。

マリンちゃん、ちょっと疲れるかもしれないけど、我慢してね。」

「はいでちゅ。」

サファに抱きかかえられたマリンは、若手始め、水晶使いたちのもとを回る。

水晶使いは少しだけ水晶をマリンへと送り込む、そのたびにマリンは静電気がおきたように全身の毛がぶわっと逆立ち、体をぶるぶると震わせ、拒否反応を示した。

サファは思い当たるだけの水晶使いたちのもとを回り、

マリンとの相性を確かめた・・・が

「全滅でした・・・。」

がつくりと肩をおとすサファ、その横で残念そうに小さくみゅつ。
と鳴いたマリン。

「そっか・・・、水晶使いがいないと、聖獣だけじゃ、黒水晶と戦うのってムリだねー。」

やれやれ。と肩をおとすアメジ。

それ以上にさらに小さく縮こまりながらマリン

「マリン・・・たかえないでちゅか？・・・マリン

アクアちゃまのおやくにたてないでちゅか・・・？

ちよんなのやでちゅ！」

体をふるふると震わせながら、ダツと走り去るマリン、
をアメジは慌てて追いかけた。

「マリンちゃん!!」

「ひくっ、ひくっ・・・」

小さな体をふるふる震わせながら、マリンは泣いていた。

「マリンなにもできないでちゅ・・・

やくたたじゅでちゅ・・・ひくっ。」

アメジがしゃがみこんでその小さな背中に触れると、一瞬びくつとなり、またぼろぼろと泣いた。

「マリンちゃん・・・アンタなんでそこまであいつのことを」

「アクアちゃまは・・・マリンのおんじんなんでちゅ。」

マリンがチビでなきむちでよわいからって、ほかのちえいじゅうちにいじめられていたでちゅ。

ちょこにアクアチャマがやってきて、マリンをいじめてたちえいじゅうたち、みんなやにげていったでちゅ。

マリンひとめみて、アクアチャマにちゅいていこーておもったでちゅ。

アクアチャマ、ちょばにいてもいいっていつてくれたでちゅ。

ちよちて、いちゅもやちゅちくちてくれるでちゅ。

だからマリン、アクアチャマにおんかえちたいでちゅ。

くろついちよいるから、アクアチャまつらいんでちゅ。

いつもうなちやれているんでちゅ・・・くろついちよわるいでちゅ。だからマリンたおちたいんでちゅ。」

涙でぐしゅぐしゅな顔のまま、アメジを見上げ必死に訴えるマリン。

「マリンちゃん・・・。」

一生懸命な、一途なマリンの気持ち、なんとか叶えてやりたいと思う、アメジだったか・・・。

相性の合う水晶使いがないんじゃない・・・。

なんとかマリンを納得させる言葉を考えていたアメジの後方から、サファの声が

「あつ、アメジさん、いました、あと一人・・・はあはあ・・・。」

アメジのもとへと駆けてきたサファは

「へ？だれよ？」

「はい、おじい様、ですよ！」
ラルじい？！

太陽から逃れるようにして立っているあのさびしい家に、アクアはいた。

机の上に、置きっぱなしになったままのマリンのクッキーに目があった。

「マリンのやつ、忘れていつてる・・・。」

小さな袋に入ったままのそのクッキーをてのひらに乗せ、マリンを心に想った。

二年前、出会った幼い聖獣は、初めて出会ったその瞬間から、自分をまっすぐな眼で見つめてくれた。

それ以来、自分を慕い、いつもついてきてくれた。

こんな自分を・・・。

アクアは自分が嫌いだった、

生まれる前、母の胎内にいた頃、黒水晶の毒をうけ、そのため他のリスタル人とは違う、奇怪な容姿で生まれたのが嫌だった。

そしてその毒の影響か、体内に宿したバケモノ級のバカデカイ水晶に、それにつりあわない、よわすぎる体。

そしてそれ以上に、弱すぎた心が・・・。

厳しすぎた父、ついていけない修行、優秀すぎた兄、周囲の自分を
見る目……

強くなれない心はどんどん傷ついていった。

一度も褒められたことはなかった。

いつも叱られてばかりだった。

ぶたれてばかりだった。

すべてが恐怖だと感じた幼いアクアの心は、逃げることを求め
た。

だれもいない、古びた廃屋へと隠れ、父に見つからぬようと、び
くびくしながら潜んでいた。

もう、十年も……。

第15話

やっと年齢が二桁になったばかりのアクアは、その廃屋に立てこもるようになった。

そこでなにをするわけでもなく、三角座りで、小さくなった体を抱えるように、父に見つからないようにとびくびくしながら、息を潜めていた。

もともと細身だったその体は、この三日なにも口にしてなかったからなのか、ますます細くなっていた。

アクアのなかでは空腹を満たすことよりも、父から逃れることのほうが重要だった。

いや、いつそのまま死んでもいいとさえ思っていた。

そんな時、ドアの向こうで物音がした。

父かもしれない。心臓だけが激しく反応する中、激しい緊張感だけがアクアのリアルだった。

激しい恐怖感が襲った、が、その物音の正体は幸運にも父ではなかった。

「アクアぼっちゃま、私です、ラズリです。」

「！」

声の主は、父に仕える聖獣ラピスの妻ラズリだった。

側に他のだれかがいるかもしれないと警戒して声を飲み込むアクアにラズリが話しかけた。

「安心してくださいな、私しかいませんから。」

「……父さんに言われて、僕を連れ戻しにきたのか？」

震える声でラズリに訊ねるアクア、そんなアクアを不憫に思いながら、優しい口調でラズリは答える。

「いいえ、そうではなくて、お腹を空かしていると思って、食べ物を持ってきたんですよ。」

「なにも食べてないのではありませんか？
ダメですよ、大事な時期なんですから。」

「……………」

ラズリの優しさに喉の奥が震えそうになりながらも、アクアは

「…………ダメだよ、僕なんかより、子供にあげなきゃ。」

「まだ生まれたばかりだし、ラズリのほうこそ大事な時期だろう？
…………早く、もどってあげなきゃ。」

「ありがとう、アクアぼっちゃまは本当に優しいお方。」

違う、ただの臆病者なんだ。

心の奥で、ラズリの言葉を否定するアクア。

「でも、ちゃんと食べてくださいね。」

「また、様子を見にきますわ。」

「……………」

ラズリが去った音を確認すると、アクアはそっとドアを開けた。
ラズリが持ってきた食べ物を、頬張った。

ラズリの優しさに、お腹だけでなく、心も少し満たされた気がした。

それから毎日、ラズリはアクアのもとを訪れた。いつもドアごしでお互い顔を見ることはなかったが、それがアクアのせいいっぱいに対応であり、ラズリもそれをわかっていた。

アクアは夜中にこっそりと外にでることがあった。

そしてこっそりと寺院に忍び込み、書庫の古本をいろいろ読み漁った。

アクアは基本的に体を動かすことより、本を読んだり、字を書いたり、とデスクワークが好きだった。

書庫で興味深い本を選んで、内容を書き写し、自分なりにまとめてたくさんを書をこしらえた。

特にアクアが好んだのは、リスタルの歴史と遺跡に関する謎など、水晶に関する謎にも興味があつたが、後ろめたい思いがあるのか、水晶使いというワードを目にするたび、心が痛んだ。

父から、水晶使いの修行から逃げてきたことが悪いことなのだとアクアは後ろめたく思っていたのだ。

だが、それに立ち向かう勇氣は、なかった。

いつものようにドアごしにラズリと語り合うアクア。

寺院の書庫で得た知識をうれしそうに話すアクアにラズリがこう話した。

「アクアぼっちゃま、本を書かれたらどうです？」

「本？！……でも、だれが見てくれるかな？……僕の書いた本なんて……。」

自分に自信のないアクアは頼りなげに答える。

「私は読んでみたいですね。せつかくの知識をいかさなくてはもったいないでしょう？」

きつとアクアぼっちゃんまは水晶使いよりも、そっちのほうが向いているんじゃないかしら？」

アクアに希望を持たせたいラズリはそう答える。

「でも・・・水晶使いになれば・・・どんなにいいだろう・・・

、
そしたら少しは父さんも許してくれるだろうな。」

力なく、さびしげに言うアクアに、ラズリは優しく答えた。

「許すも何も、族長はアクアぼっちゃんが思っているように恐ろしい方ではありませんよ。」

ただ、子供の愛し方が不器用なだけなんですよ。」

「そうかな・・・？そんなの気休めでしか・・・。」

父は自分を憎んでいるんじゃないのか？

・
母親の命を奪ってまで生まれたのが、こんな出来損ないの人間で・・・

アクアはそう思えてならなかった。

「アクアぼっちゃんま、私、もうじき子供が生まれるんですよ。」

「え？」

「私、このこにはぼっちゃんまのような優しい心を持った子に育って

欲しいと思っていますの。」

ふふ、と笑いながら言うラズリに

「ダメだ！こんな臆病者になっちゃ！」

必死で否定するアクア

「ぼっちゃま、臆病なのは悪いこととは思いませんわ。

強い者には持てない優しさを、ぼっちゃまは持っているんですから。優しい心、だれかを思いやる気持ちには、私なによりの強さだと思っているんですよ。」

ねえ、ぼっちゃま、このこが生まれたら、抱きにきてくれませんか？

お家に戻って来いという意味ではありませんわ。このこに会いにきてほしいんですの。」

「・・・ラズリ。」

それが、ラズリとの最後の会話になった。

二人目の子を生んだ後、黒水晶との戦いにおいて命を落とした。

それから二年後、アクアはそのラズリの子と会うことになる。

ラズリゆずりの虎毛に、透き通ったスカイブルーの瞳。

疑うことなど知らず、真っ直ぐな瞳は、透明な心を象徴しているかのような・・・それがマリンドった。

マリンは、母とアクアの関係もやりとりも知らなかった。

だが、他の聖獣たちが恐れるような、バケモノみたいな水晶に恐れることもなく、自分を慕ってついてきてくれた。

臆病だけど、真っ直ぐで、いつも自分を信じてくれた。

優しい瞳が、アクアの脳裏に焼きついたままだった。

アメジに連れられて、黒水晶と戦いに行ったマリン。

こんな自分のために、と勇気をふりしぼった幼い魂。

あの時のアメジの問いかけに迷いながらも、答えをだそうとしていた。

「マリン……。」

今こそ、逃げ出さない勇気をアクアは手にしようとしていた。

第16話

「マリンちゃん、まだ希望は残っているわ。
おじい様がまだいたわ。」

果たしてそれは希望といえるのだろうか・・・？
アメジとサファとマリンはラルドのもとへと向かった。

今日もそろそろ黒水晶がやってくる時間となり、いつもの場所にラルドはジスト、タルとともにいた。
アメジたちが来たときはまだ幸いにも黒水晶は来ていなかった。

「コリヤ、遅いではないか！巫女がおらんことには話にならんじやろが、
まったく、ケガで休んでおったからと、心までたるんではしようがないわ。」

「すみません、少し用事がありました。」
「そうそう、大事な用事よ。」

開き直ってアメジ答える。
アメジに抱かれたままのマリンもみゆつ。と答える。
マリンに真っ先に気づいたタルが「あつ」と叫んだ。

「ちよつ、なんでマリンを連れてきたるか？！
もうじきあいつがここにやってくるたるよ！」
ジストの足元で、ギヤーギヤー叫ぶタル。

「そう、でおじい様、このマリンちゃんとの水晶の相性を調べにきたんです。」

「なんじゃと？このチビっこと・・・ワシが？」

「ええ、おじい様の聖獣はもう数十年前に亡くなったのを最後に、おじい様はずっとおひとりでしょう。もし、マリンちゃんと相性が合えば、またおじい様だって。」

「お前、このワシを戦わせるつもりかっ？！！
なにを考えとる。そんなことをすれば・・・

アメジ殿がますますワシに惚れてしまっじやろっがっ！！」

んなわけないだろ、ジジイ。

「サファ、ラルド様を戦わせるなんて、無茶を言っな。

私とタルがみなに分まで戦っ。

マリンも、下からせるんだ。」

「ジスト様、あなたこそひとりで無茶しすぎです。

おじい様は年の割りに丈夫だから、少しくらい無茶させても平気です。」

サファ、ちょっとラルドに酷い。だが、それもジストを想っからこそその発言であって、けっしてラルドをどうでもいいと思っっているのではない。

サファは普段おとなしいわりに、いざという時頑固なところもあり、言い出したらジストであるうと譲らないときがある。ジストもそれを知っているから、半分諦めたようなため息をついた。

タルだけは強く、反対たる！と主張していた。

マリンちゃんとラルじいか・・・

アメジはふたりが並んで戦っている姿を想像してみた・・・が。

ぷりていゝとジジイ（エロ）・・・ああ、なんて絵にならない（泣）マリンちゃんの気持ちを叶えてやりたいと思ったアメジだったが、マリンの初主人となるのがラルドかもしれないと思うと、少し、いやかなり後悔した。

そんなこんなともめているうちに、あの黒く巨大な影が舞って来た。

「みな、早く構えろ！奴が来た！」

ジストが黒水晶を睨みながら、みなに叫び、体制を整える。タルもすぐジストのもとに走り、戦いの精神に入る。

「アメジさん！」

「よっしゃ、いくよ。」

アメジ、マリンを降ろすとドクロ水晶を取り出し、走り出した。サファもアメジと打ち合わせをしたわけではないが、アメジとは逆方向へ向かい、ドクロ水晶を構え、集中を始めた。

巨大なバケモノを目の前にし、小さな体がガクガクと震えだしたマリンだったが、必死でそれを打ち消そうとし、体を真っ直ぐと伸ばし、振るえを止めようとした。アクアのために黒水晶を倒したい、その気持ちだけは本当だったからだ。

アメジは大地を激しく蹴り上げることく、走りながら、力強い光の

線を描いていった。

黒水晶が真っ先に動きの速いアメジへと目標を定め、襲い掛かる。アメジはフットワークのよさで、巨大な黒水晶の体当たりな攻撃をかわしながら線を描き続けた。

アメジがおとりとなっていているおかげで、サファはわりと安全に線を描いていった。

サファは流れるような動きで、舞台上で舞っているようなステップで光の線を描いていく。

ジストもいつものように水晶をタルに込め、タルの戦闘能力を高めてやる。光の生物となったタルは二人の巫女が描いた線をつぎつぎと駆けていき、黒水晶へとぶつかっていった。

ギヤアアアー、耳に障るあのキツイ鳴き声をあげながら、痛みに悶える黒水晶は、激しく暴れながら土壁にとぶかった。

黒水晶の激しい羽ばたきに、タルははじかれ、土壁にと激しくぶつかって、大地に叩きつけられた。

「タル!!」

すぐさまジストが駆けつけたが、ダメージをかなりうけたタルはしばらく動けなくなっていた。ジストが水晶を注ぎ込むが、回復にはしばらくかかるようだ。

「すまない、二人とも、少し時間をかせいでくれ。十分ほど・・・」
「ええっ、ちよっ・・・アンタらが戦えないと意味な・・・、おおっと。」

アメジ、黒水晶の体当たりをかわしつつ、そのまま線を描きつづけ

た。

サファはラルドに声をかけながら、目をやった。

「むむう、ワシも数十年ぶりに、戦うことになるのはのう・・・

ふむ、ちと大神官の力でも見せ付けてやるとしようかの、ほれいくぞ、チビツコ。」

「みゆっ？」

ラルドにひょいと抱き上げられ、マリナー瞬縮こまった。

ラルド、しわしわの手に水晶を集めだし、マリンの体へと注ごうとした。

その直前にマリンは全身の毛をぶわっと逆立て、ラルドから飛び降り、逃げ出した。

「コリヤ！なにしとんじゃこのチビツコ！」

「ダメでちゅー！マリンやっぱりダメでちゅー！」

半泣きでラルドから逃げ出すマリナー、それを追いかけるラルド。

「ちよっ・・・ラルじい？なにやってんの？！

マリナーちゃんをいじめてんじやないわよ！」

アメジとサファはラルドの様子を気にしながら、水晶を放出しつつ、黒水晶を翻弄する。

ジストは黒水晶から逃れつつ、タルの回復を図るが、まだかかりそうだ。

アメジ、希望をラルドへと向けるが・・・

泣いて逃げるマリンとそれを追いかけるラルド・・・ダメそう。

「ラルじいーーーー!!」

ちよこまかと逃げ回るマリンを岩陰まで追い詰め、じりとにじり寄り、ついに捕まえたラルドは勝ち誇ったようにやり、といやらしく微笑んだ。その表情にがくがくと震えるマリン。

「さあ、観念するんじゃー、チビッ」。
「みゅ!!」

ラルドの手から放たれた水晶はマリンへと、

「た、たちゅけて・・・アクアちゃまーーーー!!」。

第17話

「い・・・いやでちゅ　　っ、アクアちゃまー！！」

マリンの悲痛な叫び声が響いた。

マリンの全細胞がラルドを拒絶していたのだ。

「観念するのじゃ、チビツコめが・・・。」

にじりにじりとマリンに近づくラルドの手、

その手がマリンに触れようとしたとき、それを遮る声が出た。

「マリンに触るな！！」

マリンの耳がピンとなった。

その声は下のほうからやってきた。

ラルドがその声のほうへと振り返った瞬間、マリンはその声へと駆け行った。

「アクアちゃま！」

目に涙を浮かべながら駆け寄っていくマリン、アクアはそのマリンの頭を優しく撫でてやった。

「なんじゃ、小僧！」

ラルド、ムツとした顔でアクアを見る。

「あつ、あいつ!」

「あ、もしかして・・・あの人が？」

アメジさん、やっぱり連れてきてくれたんですね。」

アクアに気づいたアメジとサファは線を描きつつ、アクアのほうへと目をやった。

「!?!?・・・まさか・・・彼は・・・。」

アクアに気づいたジストも、十年ぶりに目にする弟にしばらく目を奪われた。

「アクアちゃま!

マリンは・・・

マリンのまちゅたーは、やっぱりアクアちゃまにかいないでちゅ!

マリン・・・アクアちゃまといっちょに

たたかいたいでちゅ!」

さっきまでのおびえた表情と一転、凜とした顔でアクアを見上げたマリン。

アクアを見つめる真っ直ぐな、スカイブルーの瞳にアクアの心が激しく揺れた。

「マリン・・・あんなバケモノにぶつかっていくの怖くないのか?」

まばたきすら忘れている力強いその瞳を見つめながらアクアは問いかけた。

「アクアちゃまいっちょなら・・・
マリン・・・こわくないでちゅよ！」

太陽にきらりと照らされた青空色のその瞳にアクアは勇気をもらった。

もう一度マリンの頭を撫でた後、すくと立ち上がり

「じゃ、マリン・・・いくぞ。」

アクアの答えにマリンの瞳はうれしそうに輝いた。

「はいでちゅ！」

アクアは集中する。

激しく暴れそうなどしようもない自分のその水晶を、なんとか上手く流そうと、呼吸を整えながら、集中する。

じっとアクアの水晶体を待つマリン、幼いながら戦う獣の目をしていった。

喉の奥が千切れそうになりながらも、なんとか右手へと水晶を集め始めたアクア、あと少し、そう思った瞬間集まった水晶が逆流を始め、それに耐え切れない弱い体が呻いた。

「アクアちゃま！」

その場に膝を着いたアクアに、マリンが駆け寄ろうとしたが、アクアはそれを止めた。

「すまないマリン、久々に水晶を使ったから、体がびっくりしただ

けだ。」

ハアハア、途切れそうな息を悟られぬようにと、深呼吸し、呼吸を整える。

ムダなドキドキを押さえない。

ここには、自分を怒鳴りつける父はいない。

マリンが待っている。

落ち着け

少しだけ、水晶を・・・ここに集める！

アクアは手のひらに一握り分の水晶を集めた。

「！よし、マリン！」

その水晶をマリンへと向けて放った。

「はいでちゅ！アクアちゃま。」

アクアの水晶を受けたマリンはタルのような輝ける聖獣となり、アメジたちの描いた光の道を駆け出した。

その様子を見ていたラルドはぽかーんとなっていたが、アメジは軽くガツポーズ

「あいつ、やるじゃないかー。」

タルへと水晶を注ぎ続けるジストは

「・・・やっぱり、アクア・・・なのか？」

まだ半分信じられない目でアクアを見ていた。

小さな体ながら光の生物兵器と化したマリン、光の道を駆けながら黒水晶へと到達。

激しくぶつかった。

マリンがぶつかりと体をねじらせ、翼を激しく羽ばたかせマリンを払おうとした黒水晶だったが、一撃与えたマリンはすぐさまアクアのもとへと駆けてもどった。

「アクアちゃま！いけるでちゅよ！」

初めての攻撃が上手くいった喜びで嬉しそうなマリン。

そんなマリンの気持ちに伝えられてうれしいアクアだったが、

「なにをしとるか、はよせんか！！次がくるぞ！」

気がつけば、いつもの安全地帯に避難済みのラルドが岩から顔をのぞかせながら叫んだ。

「アクアちゃま、おねがいちまちゅ。」

アクアを信頼しきっているマリン。すぐに、とアクアの水晶を待つ。

アクアはマリンの期待に応えようと、再び水晶を集めだすが、

「ギャアアアアー！！！」

黒水晶のあの声に集中を乱された。

「！うつ、くうつ！！！」

暴れるように放出されたアクアの水晶は、その手に集まることなく、大地の中へと吸収されていった。

肌の奥が燃えるように熱く、軽く火傷を負ったような感触を受け、地面へとへたり込んだ。また呼吸が乱れる。

「アクアちゃまー」「ギャアアアアー！！！」

マリンの声が、あの声にかき消される。

ダメだ・・・やっぱり俺は・・・

現実から、遠ざかりそうになるアクアの意識・・・

それを戻したのは

「!？」

地面が離れたのにアクアは驚いた。立ち上がってはいない。

「なにやってんの？ほら水晶集めて！

マリANCHちゃん待っているでしょ！」

自分は抱え起こされた、アメジに。

「お前・・・」

「あたしが支えてあげるから、アンタは水晶集めることに集中してな、

黒水晶の動きは見ててあげるから。」

アメジ横目でにつ、とマリNに微笑む。

アクアは隣のアメジに呼吸の乱れを悟られまいと、顔を背ける。

「フン、俺はな・・・目で見なくても、あいつの動きは感じ取れるんだよ・・・。」

「よく言つよ、足がくがくじゃん。」

アメジ、自分の膝でアクアの膝をついた。

うあつ、とおもわずよろけたアクアに、にししと笑った。

「くっ、なにす・・・」

「いーから、集中始めて！」

キツ、とマジメな顔のアメジに、アクアは黙って集中を始めた。

アメジがアクアを支えている間、サファがひとりで光の線を描き続ける。

ジストはアクアたちのほうを気にしながらも、タルの回復を続ける。

そしてラルドはアメジたちの後ろから、

「アメジ殿！ワシ以外の男とそんな密着してはなりませんぞ！！」

「ラルじいうっさい！！」

やーやー言っていた。

「くっ」

また水晶を上手く集められず、アクアの水晶はムダに放出された。特にアクアは黒水晶の毒によって、生まれつきバカデカイ水晶を体内に持っており、それだけに水晶のコントロールが難しかった。

なかなか思うように手に集まらなかった。

そのたびに体力を消耗した。元々体力のないアクアの息はかなりあがっていた。

失敗、そのたびに何度も父に叱られた。今もまだ、あのころの幼い傷跡のまま。

きつと刺し殺すような視線・・・アクアの弱い心、恐怖心がまたア

クアの足を止めようとした。

「どうしたの？もう限界？」

「くっ、うるさい・・・お前に俺の辛さ・・・なんか・・・」
息きれながらも、隣のアメジを睨む。

「マリンちゃん、あんな小さな体であんなバケモノにぶつかっていいんだよ。アンタにそんな勇気ある？」

「・・・ハア・・・ハア。」

アメジから目を逸らし、息の乱れをリセットするようにツバを飲み込むアクア。

そして、マリンへと目をやった。

真っ直ぐな目で、アクアを待つマリン。

「マリンちゃんは、ほんとアンタのこと、信じているんだね。」

だから、あたしも、

少しかけアンタのこと信じてみるよ。

さ、あきらめんな、マリンちゃんの気持ちに応えてあげて。」

「・・・お前・・・」

「今はケツ蹴られたことも忘れてやるから。
さ、いくよ。」

震える口元を見られまいと、アメジから顔を背けたアクアは、再び水晶を集めだした。

血管が切れそうなほど赤らんだ体を押さえながら、水晶を手のひらに集めた。

キツと耳を天へと立てたマリンに向けて、集めたそれを放った。

マリンはサファの描いた線に乗って、黒水晶へと走った。

第18話

アクアからの水晶を得たマリンは再び光りながら天を駆け上っている。

凄まじい速さで黒水晶という目標に到達し、
激しくぶつかった。

「!!!!!!」

その衝撃に身をよじらせる黒水晶。

ジタバタと羽ばたきながら、自分へとぶつかってきたそれを睨むかのような表情で向きかえた。

一撃を与えたマリンは、くるりと向きを変えた後、素早くアクアのもとへと戻ってきた。

「アクアちゃま！」

「マリン・・・」

「でかしたマリンちゃん！」

アメジたちがマリンを褒める間もなく、黒水晶がこちらへと襲い掛かってきた。

「マリン！」

反射的にアクアはマリンを胸元へと抱き寄せ、アメジはそのアクアを脇に抱えたまま、横飛びして、黒水晶の体当たりをかわした。

地面すれすれまで顔を近づけた黒水晶は攻撃をかわされたことを気にする様子もなく、地面をガツと蹴り上げ、砂煙を上げながら、再び舞い上がった、そして再びギャアアと鳴いた。

「いくでちゅ！」

戦いのリズムが刻まれてきたマリンは再び黒水晶へと向かうチャンスを待っていた。

耳をぴんと立て、アクアの指示を待っていた。

アクアもまたそれを感じ取っていた。お互い目で合図が送れるほどに、お互いを感じあっていた。

アメジはアクアの横で小さく「もう一度。」と言った。

アクアはそれにこくりと小さく頷くと、水晶を集めマリンへと放つ。

「ん・・・」

ジストの膝上で気を失っていたタルの体がかすかに動いた。

「！タル・・・気づいたか？」

パートナーの目覚めに気づいたジストは水晶を送るのを止め、タルの右頬を親指でそつと撫でた。

「ジスト、もう大丈夫たる・・・！？

アレは・・・誰たるか？！」

タルは黒水晶へと向かっていくその聖獣を目にして、目が点になった。まさか・・・

「マリン？」

信じられないといった表情でその姿を見ていた。

戦っている妹の姿をみてぶるぶると体を震わせながら、ジストに

「ジスト行きたる！」

マリンにばかり危険なめに合わせられないたる！」

ジストの膝からぴょんと飛び降りると、全足をぴんと立ち上げ、ジストを呼んだタルは戦士のオーラを放っていた。

「ああ。」

タルのその姿に共感し、ジストも再び戦闘モードに突入する。

サファが描いた光の線を駆ける二体の聖獣。

マリンが駆ける後を、タルが駆ける。

はげしくぶつかる二つの光に、ドンと吹き飛ばされ、

強いダメージをその体に刻まれた黒水晶。

またギヤアと千切れそうな鳴き声を上げた後、山脈の向こうへと消えていった。

大地には黒水晶が落とした血痕が点々と残った。

一仕事終えたサファはふうー。と息をつきながらその場へと座り込んだ。

タルはすぐさまマリンのもとへと走った

妹のことが心配だったし、いろいろ言いたいことがあったし、しかってやりたかったのだが・・・

「こらっ待つたるマリン！！」

マリンは真っ直ぐにアクアのもとへと走って行った。

無茶して姉の気持ちも知らないでとぶりぶりするタル、自分より真

っ先にアクアのもとへと向かわれた。嫉妬心が混じったような複雑な気持ちでその後姿にぷりぷりとしていた。

そのタルの隣で、十年ぶりに目にする弟を不思議な気持ちで見つめていたジストがいた。

ジストは弟にかける第一声をずっと考えていた。

先ほどの戦いぶりを褒めてやるのが先か、

今までなにもしてやれなかったことを謝るのが先か・・・と。

「アクアちゃま！やったでちゅよ！

マリンたち、くろついちょうおいばらったでちゅ！」

まん丸な瞳でうれしさが零れそうなマリンがアクアに話しかける。

そんなマリンを「よくやった。」と褒めて撫でてやりたかったアクアだったが、

体がそれすらも許してくれないほど疲労していた。

自分を抱えるアメジに体を預ける様に、アクアは目を閉じた。

「！アクアちゃま？」

心配するマリンに安心するようアメジが言った。

「大丈夫よ、疲れているだけだから。」

アメジにこくと頷いたマリンは一言

「おつかれちゃまでちゅ。」

と言ってぷりぷりと自分を見ているタルへと向き直った。

もう自分は一人前だから心配いらない、という態度をタルへと見せた。

「マリン！やっぱりお前は戦いなんてダメたるよ！
今回成功したからって調子に乗っちゃダメたる！」
ぷりぷりするタルを落ち着かすようジストが言った。

「まあ落ち着けタル。」

今回マリンと・・・アクアのおかげで助けられたんだ。
な。」

「・・・そうたるけど。」

認めてやりたい、でもしたくないそれを邪魔する姉心であった。

アメジはアクアを抱えたまま、その場へと座り込んだ。

そして目を閉じたまままだ少し息が乱れたままのアクアへと目をや
った。

「アンタもなかなかやるじゃん。少し見直したよ。」

アクアをムカツクかわいくない奴だと思っていたアメジだったが、
この戦いの中でアクアに対する想いが少し変わった。

ひねくれものでやな奴だけど、マリンちゃんへの想いは絶対なんだ
な。

「ん？なに・・・」

アメジの膝の上でかすかな声が発した一言

「・・・あり・・・がとつ。」

そうつぶやいた後、アクアの意識は遠のいていった。

アメジの後ろから

「アメジ殿ー、ワシにも膝枕ををー」

というラルドの声がしていたが無視した。

アメジはなんだこいつーと言いながらアクアの頭をぐしゃぐしゃしていた。

アクアの中に発生したある感情に気づくはずもなく、アメジは黒水晶を倒した後のアメジ感謝祭に胸を躍らせていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310z/>

アメジスト

2011年12月26日22時46分発行